死炎の副船長

リューカリッカ

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

死ぬ気の炎を扱う麦わらの一味の副船長は一体どんな冒険をするのか。彼は果たして自由に生きるという目的を果たせるのだろうか。

※初めての作品です。温かい目で見てください。

※作者の知識はゾウを出て万国に向かっているらへんで終わっています。アニメを見ながら書くので、大幅な変更があるかもしれませんがご了承ください。

目次

はじまり ―― 1
コルボ山編
終着駅の悪ガキたち ―― 3
今日から俺達は ―― 9
兄弟との別れ ―― 16
大海賊編
新たな出会い ―― 22
〝白ひげ〟　エドワード・ニューゲート ―― 29
覚悟とは？ ―― 36
原作開始前のキャラ紹介 ―― 42
原作突入　東の海編
旅立ち ―― 45
再会 ―― 52
さらば、東の海 ―― 58
偉大なる航路編
偉大なる入り口 ―― 63
王家の依頼 ―― 68

はじまり

落ちていく。
どこまでも深く、底が見えない深い穴に落ちていく。
だんだんと意識が遠のいていく。
あぁ、我が憧憬は何処に？
まぶたも開けていられないほどに目が重くなっていく。
今度こそ彼のように自由に、彼らのように誇り高く…
一抹の望みをかけて、燦然と輝く炎に手を伸ばし…

――東の海《イーストブルー》 セッテ島
おぎゃぁぁぁぁぁぁぁぁ！
「おい！産まれたのか!?」
「ええ、私と彼との子よおじいちゃん。」
「そうか！奴が早く帰ってくるといいｇ」バタンッ！
「レイナ！その子が私たちの！」
「ええ、ジョット。この子が私たちの息子よ。」
「そうか、この子がおれたちの宝か！」
「フフッ。この子の名前は決めた？」
「あぁ、この子の名前はリベル。トゥーリ・Ｄ・リベルだ！」
―８年後
大きな屋敷の中で、白髪の老人が大きな声で叫んでいる。
「リベル！リベルは何処だ！」
どうやら誰かを呼んでいるらしい。
すると、庭のほうから小さな子供の無邪気な声が聞こえた。
老人がそこへ向かうと、栗色の髪で鮮やかなオレンジ色の目をした少年がブランコを必死になって漕いでいた。
「リベル、ここにおったのか。」

その声に反応して、少年はブランコから飛び降りる。
とても危ない行為に思えるが、少年に施している教育（修行）の賜物か、怪我をすることなく軽やかに着地した。
「あ、じいちゃん。どうしたの？」
少年が老人に話しかける。
どうやら老人は、このリベルと呼ばれた少年の祖父にあたる人物のようだった。
「リベル、お前キャンプに興味はないか？」
「ある！みんなでいくの？」
「いや、わしらはちょっと仕事で遠くに出かけにゃならんくてな。お父さんもお母さんも連れて偉大なる航路《グランドライン》まで行かなくてはならん。そこでお前を知り合いの下に預けたいと思っとるんじゃが…」
その言葉に少年は目に見えて落ち込む。
「おれは行ったらだめなの？」
「駄目じゃ。偉大なる航路《グランドライン》は危険なところだからな。満足に死ぬ気の炎を扱えないお前にはまだ早いところじゃ。」
その言葉にさらに深く落ち込むリベルだったが、すぐに顔を上げて言った。
「もしおれが死ぬ気の炎をつかえるようになったら、じいちゃんがいつも聞かせてくれるみたいなぼうけんにつれていってくれる？」
「あぁ、もちろんじゃ。お前の会いたがっていたニューゲートのやつにも会わせてやろう。じゃから今回はおとなしく留守番しといてくれるか？」
「うん、まかせて！それでおれはどこに行くの？」
「ああ、コルボ山じゃよ。」

コルボ山編
終着駅の悪ガキたち

――――東の海《イーストブルー》ドーン島　コルボ山　リベル視点

「この子をここに預ける。２年もしたら迎えに来るからそれまで預かっておいてくれダダン。」

「それはないですよティモさん！ここにはただでさえエースっていう悪ガキがいるんだ！これ以上ガキが増えても面倒見切れないですよ！」

太った女性がそういう。

どうやらこの女性は〝ダダン〟というらしい。

「なんじゃ。貴様らは儂に返しきれんほどの貸しがあったと思うんじゃが？話が聞けんというのならここで清算してもらおうか？」ゴゴゴゴッ

じいちゃんの指輪から赤色の炎がほとばしる。

じいちゃんが言うにはこの炎は〝嵐の炎〟というらしく、こうげきのーりょくに長けたじいちゃんがいちばん使う炎らしい。

「わかりましたわかりました！だからその炎を消してください危なっかしい！」

「わかったのならいい。預ける間の面倒は頼んだぞダダン。」

そういうとじいちゃんはこっちをふりむいておれに目を合わせる。

「じゃあのリベル。２年後に必ず迎えに来る。」

そういうとじいちゃんは消えてしまった。

目にもとまらぬ速さで動いたんだと思う…たぶん。

家ではよくあることだった。

「これからよろしくね、ダダンさん。」

「よろしくしてやるかクソガキ！あんたのことなんてティモ…あんたのジジイのことがなきゃ絶対に預かってやらなかったんだ！まったくガープもティモもそろいもそろって面倒をかけてくれる！いい

かい、明日からあんた死ぬ気で働いてもらうぞ!!掃除・洗濯・クツ磨きに武器磨き!窃盗略奪詐欺人殺し!ここでさせられたことはジジイにチクるんじゃねぇぞ!」
「一日に一回茶碗一杯の米、コップ一杯の水!これだけは保証してやるから、あとは自分で調達しな!」
「わかったよ。ここにはもともとキャンプのつもりで来てたしね。とったエモノも分けたらいいんでしょ、ダダンさん?」
「もういやだこのガキたくましい!ここに預ける意味ねーだろティモのやつ!!」ガチャ
ドアの開く音につられてそちらを見ると、するどい目をした少年がいた。
その少年はこちらをちらりと見ると、むすっとした顔でくるりと外へもどっていった。
「今の子は?」
そうたずねるとダダンは「あいつはエース。あんたみたいに押し付けられたクソガキだよ!」と答えた。
「おれちょっと行ってくる!」
そう叫ぶとエースの下へ走っていく。
おれを呼び止める声をむしして、エースへ話しかけた。
「おれの名前はリベル!仲良くしようよ、エース!」
その声をむししてどんどん先へとエースは足を進める。
むきになったおれはさらにエースに声をかけようと足をふみ出した。
その瞬間　ドンッ　と音がした。
前を見ると木がこちらにむかってたおれてくる。
「うわぁ!」
とっさにかわす。
安心してため息が出た。
「そうだ、エースは!」
まわりを見わたしても、エースはいなかった。
仕方がないので野生の動物や食べられる山菜をとり、ダダンの家へ

ともどる。
次の日からおれはエースに付きまとい続けた。
エースがどこに行くにもついていき、エースがついてこないようにじゃまするのも乗りこえ続けた。
何日もの間エースに話しかけては見失い続け、ついに森をぬけた先にある不確かなものの終着駅《グレイ・ターミナル》へとたどり着いた。
そこにはエースがいた。
何やら金髪でぼうしをかぶった少年と話している。
ばれないように近づくと声が聞こえた。
「おい、サボ。いるか？」
「エース、遅かったじゃないか。俺はもう準備万端だぜ？」
「そうか、俺もだ。早く一仕事して海賊貯金を増やすぞ！」
「へぇ、ふたりは海賊になりたいんだ。」
後ろから声をかけると、ぎょっとした顔で二人がふりむく。
いつもむすっとした顔のエースしか知らないおれは、すこしうれしい気持ちだった。
「おい、お前なんでいやがる！」
「こいつがエースの言ってたリベルか？だからお前もここに住めって言ったのに…山道修行があだになったなどうする？」
「殺す…と言いたいところだが駄目だ。こいつはティモのじーさんの孫、つまりトゥリニセッテの一人だ。」
「トゥリニセッテ!?あの最強の自警団トゥリニセッテか!?」
「ああ、現党首であるジョットは四皇とも張り合えるくらいの猛者らしい。うかつに手を出したら島と消される可能性もある。…そうだ！記憶がなくなるまで頭をたたき続ければいいんじゃないか？」
「それでいくか…早く殴れよエース。」
「お前が殴れよサボ！なんかこいつ…殴りづれぇんだよ。」
「俺もだ…もうこいつを巻き込んで仲間にしたほうが速いんじゃないか？」話に入ることもできないままどんどん話が進んでいく。
どうやらおれは殴られずにすむらしい。

「なんでこいつを仲間に入れなきゃいけねぇんだ！弱い奴はいらねぇよ！」カッチーン
弱い？おれは修行もしっかりやってきたんだ！エースなんかに負けない!!
「じゃぁ勝負しろよエース！何もおれのことを知らないで弱いとは言わせねぇぞ！」
「望むところだ！これでお前が負けたらこのことは全部忘れて俺に二度と近づくな！」
「こっちこそ！勝ったら謝ってもらうからな！」

――東の海《イーストブルー》ドーン島　不確かなものの終着駅《グレイターミナル》とある開けた空き地
二人の少年がボロボロになって向かい合っている。
それを眺めるような、心配するかのようなまなざしで見つめる少年が一人。
その少年の目に映る二人は、立っているのもやっとのようだった。

「ハァッ…ハァッ…　やるじゃないかお前…」
「ハァッ…ハァッ…　エースこそ…やるじゃん…次の…一撃で…決着をつけよう…」
「あぁ…俺もそのつもりだった…」
(勝負はおれ（俺）のほうが不利（有利）だ…でも（だから）…エース（こいつ）には…)
「「負けたくねぇ!!」」
「「うおおぉぉぉぉおおおおお!!!」」ドンッ
お互いの鉄パイプがぶつかり合う。
拮抗しているように見えたが、徐々にエースが優勢になっていく。
「これで…終わりだ！」
エースが押し切ろうとしたその時
「まだ…まだ負けてねぇ!!」ボウッ
リベルの額から、鮮やかなオレンジ色の炎が吹き出した。

それに目を奪われるのと同時に、エースの鉄パイプを押し切られた。
そして、
「おおおぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉ!!!」ドンッ
リベルの振るった鉄パイプが、エースの腹をうち抜いた。
ドサリ…とエースが倒れる。
「へへッ…おれの…勝ちだ…」ドサリ
その言葉と同時にリベルも倒れ伏した。
それを聞いて我に返ったサボは、二人を秘密基地まで連れ帰った。

――――東の海《イーストブルー》ドーン島　不確かなものの終着駅《グレイターミナル》秘密基地　リベル視点
「あんなもんずるだろ！やり直しだやり直し！」
「やだね！勝ちは勝ちだ！早く謝れエース！」
自分の言った言葉におれはエースに勝ったんだなぁ…と喜びを覚える。
それと同時に負けたにもかかわらず謝ろうとしないエースの往生際の悪さがなんだかおもしろかった。
「負けは負けだよエース。ところで、あの炎は何だったんだ？」
とサボが尋ねる。
「あれは〝死ぬ気の炎〟だよ。トゥリニセッテが最強って呼ばれる理由でもあるんだ。詳しくはおれもあんまりわかってないし、あんなのになったのは初めてだ。」
「じゃあやっぱりお前の実力じゃないじゃねぇか！まぐれだろあんなの！」
とエースが吠える。
「それでもおれの勝ちだよエース。で、何か言うことがあるんじゃないの？」
おれは笑って尋ねる。
勝ったことによる精神的な余裕があった。
「グッ…悪かったよ。お前は別に弱くねぇ。俺たちの仲間になるの

も認める。ただし、上は俺たちだからな！」
「なんでだよ、勝ったのはおれだぞ！おれたちは対等、友達だ！おれたちは強くなって、いつか海に出よう！おまえたちがおれには必要だ！」ドンッ
「チッ…仕方ねぇな。」（俺が必要だと…）
エースがしぶしぶ認める。
口調こそしぶしぶだったが、どこか嬉しそうだったようにみえた。
「これからよろしくな。エース、サボ！」
「おう」
「よろしくな！」

――3か月後　東の海《イーストブルー》ドーン島　コルボ山
ダダンの家　リベル視点
ドンドンッ　アケンカーダダンー
朝からうるさい音がする。
どうやら誰か来たみたいだ。
ダダンが見知らぬ男とやり取りをしている。
そして一人の麦わら帽子をかぶった少年を置いて山を下りて行った
その少年はおれに気が付くと嬉しそうに近寄ってきた。
「俺の名前はモンキー・D・ルフィ！仲よくしよう！」

今日から俺達は

――――東の海《イーストブルー》 ドーン島　コルボ山　リベル視点

「モンキー・D?もしかして、ガープさんの孫?」
「じいちゃんのこと知ってんのか?!」
「うん、あの人に殺されかけたことがあるからね。」
あれは3年前だったかなぁ…

――――3年前　東の海《イーストブルー》 セッテ島　リベルの家

大きな船が近づいてくる。
船首には犬のようなものがついており、その船の帆は堂々と海軍であることが示されていた。
船が島に停泊し、一人のたくましい男性が船から降りてくる。
「おい、ティモ!!おらんのか!わしが来てやったぞ!!」
「なんじゃ騒がしい。…あぁ、ガープか、何をしに来た。」
「ぶわっはっは!孫の顔を見に遥々東の海《イーストブルー》に来たんでな。ついでにお前さんの顔も見に来たんじゃ。…で、お前さんの服の裾を掴んどるそこの子供はなんじゃ?」
「わしの孫だ。リベルや、こいつの名前はモンキー・D・ガープ。こんなりでも海軍中将で、わしの旧友じゃ。」
ティモがリベルに向けてそう説明する。
するとリベルは隠れていた祖父の後ろから顔を出し、おずおずと挨拶をする。
「初めまして。トゥーリ・D・リベル、5歳です。」ガシッ
挨拶とともにリベルがガープに持ち上げられる。
じたばたと抵抗するが、ガープは全く意に介さず言葉を続ける。
「ふむ…5歳か。ルフィの一つ上じゃな。おぬしも立派な海兵にしてやろう。」
そういってガープはリベルを真上に放り投げた。

１５ｍほど上に打ち上げられたのち、自由落下が始まる。
「うわぁぁぁぁぁぁぁぁ!!!」
リベルが絶叫をあげると、すぐに家から紫色の炎を吹き出したジョットが飛んできてリベルを抱きかかえた。
ジョットはリベルがしっかりと己に捕まったのを確かめると、ゆっくりと降下し始めた。
下ではティモとガープが激しい争いを繰り広げていたが、黄色い炎を纏ったレイナにすぐに鎮圧され正座をしていた。
「二人とも？これは何の騒ぎです？」ゴゴゴゴッ
「「いや、こいつが…あぁ?!」」
「ふたりとも？」
「「はい…」」
そこにジョットが下りてくる。
事の顛末がリベルとティモによって話されると、ジョットとレイナはガープを掴むと炎を吹き出し近くの無人島まで飛んで行った。
―１０分後―
「ずびばぜんでじだ…」
と顔中を腫らしたガープが謝る。
それを見た海軍の兵士たちはざわざわとしているが、二人の視線を受けすぐに静まる。
「「それでリベル。このくそジジイをどうしたい？」」
「ぼくはもう大丈夫だよ。お父さんが助けてくれたから。」
そうリベルが答えると、二人は険しい視線とガープにのみ向けていた威圧を解いた。
「うちの子に免じて許すが…次はないと知れよこのくそジジイ。」
ふたりは冷たい声で言う。
これほどまでにキレた二人を、リベルは初めて見た。
それに少しおびえていると二人は慌てて
「「もう怒ってないよ」」
とリベルをなだめた。
落ち着いたリベルを見て、ガープは詫びの代わりとして手品のよう

に足から斬撃を飛ばしたり、消えたようなスピードで動いたり、空を跳ねたりする〝六式〟という技をリベルに簡単にレクチャーし帰っていった。

――――時は戻り、リベル視点

「…ってことがあってさ。」

「へー、お前も大変な目に合ってるんだな。おれもじいちゃんに無人島においていかれたりしてさ！」

と盛り上がっていると

「おい、いつまで話してるんだリベル！行くぞ！」

と声がする。

「あ、待てよエース！じゃあねルフィ。また今度！」

と急いでエースの後を追う。

俺も連れて行ってくれよ！っていう声が聞こえたけど、さすがにルフィにはまだ早い気がするからおいていくことにした。

ところがルフィは追ってくる。

するとエースは目の前の木を蹴り倒し、ルフィの行く手を阻んだ。

「いいの、エース？エースとも仲よくしたいみたいだったけど？」

「ほっとけ、あんな奴。」

そんな日々が1カ月ほど続いた。

さすがにエースが橋を落とした日は怒り、ルフィを探しに行ったらルフィは谷底でオオカミに追いかけられていた。

ルフィを救出すると怖かったのか泣き出した。

そのまま家に帰るとエースの

「泣き虫は嫌いだ。」

という言葉にぴたりと涙がやんだのは思わず感心した。

そしてさらに2カ月後。

ついにルフィが森を超えて俺たちの秘密基地にたどり着いた。

ルフィがこんなところまで来れるようになったなんて…と感動していると、いつの間にかルフィは捕まっていた。

何やら殺すという物騒な話までしている。

まるで最初の出会いのようで少し懐かしい気持ちになっていると、ルフィに助けを求められた。
それに応じようとすると、ルフィの大声に誰かが寄ってきた。
慌ててルフィの縄をほどいてその場から離れて様子をうかがっていると、ルフィがつかまっていた。
…なんで？
そう考えていると、ルフィがおれとエースに助けを求めている。
思わず飛び出そうとするが、エースとサボの二人に強引に押しとどめられた。
「ムグググッムグッ」（なにすんだよっはなせっ）
そう抵抗していると、ルフィは連れ去られていった。
二人の拘束が緩んだので振り払って文句を言う。
「何してるんだ！早くルフィを助けないと！」
「そんなことより海賊貯金を映すほうが先だ！あいつが口を割る前に移さないと全部取られちまう！」
「そんなことってなんだよ！おれ一人でも助けに行くぞ!!」
「…クソッ！海賊貯金を映したらおれたちも助けに行く！それでいいだろリベル！お前も早く手伝え！」
「…絶対だからな！早くしよう。」
本当はすぐにでもルフィを助けに行きたかった。
でも一人で行っても勝てないのは冷静じゃないおれでも判断できたので、一刻も早く海賊貯金を移してルフィを助けに行くことにした。
――――宝を移し終えて
「早くルフィを助けに行くぞ！」
「待て！場所が先だ！サボ、あいつら向こうに金、探しに来てたか？」
「ハァ…ハァ……いや来てねぇ！探しになんか来るわけねぇんだ!!あのルフィってやつ…まだ口を割ってねぇんだよ!!!」
その言葉に泣きそうになる。
ルフィを早く助けに行かなければと、体が自分に訴えかけるように

鼓動が速くなる。
気が付くと額には、またオレンジ色の炎が灯っていた。
「エース、サボ。先に行かせてもらうぞ。」
そう一声かけるとオレは目にもとまらぬ速さで駆け出して行った。
ガープの爺さんに習った〝剃〟という技が、今はできる気しかしなかった。
ほどなくしてルフィがつかまっている場所にたどり着くと、ルフィはボロボロになって吊るされていた。
そこから先は覚えていないが、エースとサボが着いた時にはボロボロになったおれと深い傷を負った船員たちが倒れていたらしい。
おれが目を覚ますと、そこはダダンの家でサボも住むことになったらしい。
そこからおれたちの生活は始まった。
一日1人150戦ずつ行い、ルフィは全敗で最下位、おれたち3人は勝ったり負けたりを繰り返していた。
その中でも特にエースとサボは抜きんでていて、おれは2人を相手に10回に2回勝てるかどうかだった。
そしてある日のことだった。
いつものように食い逃げをしていると、街中でサボが声をかけられた。
そのことを二人と一緒に問い詰めると
「「ええええ!?貴族の息子?!…誰が?」」
「…俺だよ!…」
「「で?」」
「お前らが質問したんだろ!!」
と話した。
サボはゴア王国の貴族で、今日呼び止めたのはサボの父親だったらしい。
おれの両親と違って、サボの両親は自分のことしか考えられない人たちのようだった。
「エース、リベル、ルフィ…!俺たちは必ず海に出よう!この国を飛

び出して自由になろう!!広い世界を見て俺はそれを伝える本を書きたい！航海の勉強なら何の苦でもないんだ!!もっと強くなって海賊になろう!!」

〝自由〟…

この言葉はやけにおれの胸に響いた。

なぜ自分はこれほどまでに自由に焦がれるのだろうか。

言いようのない憧れが、〝自由〟という言葉に詰まっているようだった。

そんなことを考えていると、3人がこちらを見てくる。

どうやら誰がおれを船に乗せるかを争っているらしい。

「「リベル、お前は俺の船に乗るよな?!」」

3人が詰めかけてくる。

おれは苦笑いしながら、自分の考えをまとめた。

「おれはあとどれくらいかで迎えが来るんだ。そのあと鍛えて強くなったら、必ず海に出る。最初は旅人としてこの海をめぐって、偉大なる航路《グランドライン》に入る。そこで最初にあった3人の誰かの副船長になるよ。」

「「ならうちの副船長だな!!…お前らには渡さねぇぞ!!」」

と喧嘩が始まりそうになる。

嬉しい気持ちでいっぱいだったが、それを抑えて喧嘩を仲裁するとエースがおもむろに酒を取り出した。

「あ！ダダンの酒盗んできたな！」

とルフィが言う。

「お前ら知ってるか？杯を交わすと〝兄弟〟になれるんだ。」

「〝兄弟〟～!?本当かよ!?」

「海賊になるとき、リベルは俺の船に乗るから「「俺の船だ!!」」…まぁ聞け。リベル以外は同じ船の仲間になれねぇかもしれねぇけど、俺達4人の絆は〝兄弟〟としてつなぐ!!どこで何をやろうとこの絆は切れねぇ…!!」

「これで俺たちは今日から兄弟だ!!」

「「おう!!!」」

この日からおれたちは兄弟になった。
おれ達が揃えばできないことはないと思ってた。
この日がいつまでも続くと思っていた。
しかし、出会いがあれば別れもある。
その日、おれは…俺は。
自分の無力さを痛感することになる…

兄弟との別れ

――――東の海《イーストブルー》ドーン島　秘密基地　リベル視点

「ハァッハァッ…」

なんだか体が重い。

寝床から起き上がるのも困難なくらいだった。

あれから修行を重ねる中で、死ぬ気の炎を額に灯し戦闘能力を飛躍的に向上させる状態…〝死ぬ気モード〟をある程度扱えるようになった。

しかし、体が出来上がっていない状態で調子に乗って多用したせいか、そのツケが一気に体を襲ったみたいだった。

どこかでぼんやりと俺を呼ぶ声が聞こえる。

体を激しく揺さぶられているみたいだ。

次第に声がはっきりと聞こえ出した。

「「オイ・・・オイ・・・!!キコエルカ?……おい、リベル!!」」

「…だいじょうぶ……聞こえてるよ…どうしたの?」

「どうしたのって…お前が起きられないくらいに体調が悪いから心配してるんだろ!?」

「大丈夫がぁリベルゥ〜〜肉、肉ぐうがぁ〜〜」

とサボやルフィが心配する声が聞こえる。

自分自身原因はつかんでいるので、死ぬ気の炎の代償だと伝えると、3人はどこか安心したようだった。

「…3日くらいは…体調が…悪いままかもしれない…おれのことは気にせず…3人で稼いできてくれ…」

「…わかった。行くぞ、サボ、ルフィ。」

とエースが準備を始める。

残って看病するんだと泣いて駄々をこねるルフィを引きずるように連れていくと、3人はいつものように不確かなものの終着駅《グレイターミナル》へと向かっていった。

「ハァッ…ハァッ…しっかりと…体を…鍛えないとな。」

と眠りについた。
―次の日
その日も同様に、３人は稼ぎに出かけた。
しかし、その日に帰ってきたときにはサボはその場にはいなかった。
「…あれ？サボは…どうしたんだ…？」
「…サボは連れていかれた。」
「連れて行かれた?!誰に連れて行かれたんだ!!」
自分の体調が悪いことも忘れてエースへと詰め寄る。
まだ本調子じゃないのか体は言うことを聞かず、へなへなと崩れ落ちてしまった。
「…貴族の親にだよ。今は放っておいてやろうぜ…これがあいつの幸せかもしれねぇんだ…」
―次の日の夜
体調がぐっと良くなった。
おそらく明日には全快しているだろう。
朝に備えてもうひと眠りしようとしたとき、ある異変に気がついた。
「山が…燃えてる…？」
いや…あれは山じゃない！
あれは…
「不確かなものの終着駅《グレイターミナル》が…燃えてる…？」
そこでふと気が付く。
「エース、ルフィ！」
気が付いてからは止まれなかった。
使うことを控えていた死ぬ気モードを使ってまで、全速力で山を駆け抜けた。
「エース、ルフィ！どこだ!!」
大声を張り上げる。
すると自分の感がこっちのほうにいると全力で訴えかける。
迷わずそれに従い駆け抜けていくと、ダダン以外の山賊たちがル

フィを抱えて走っているのが見えた。
「ルフィ、みんな！エースとダダンはどうした!!」
そう声を荒げると、ルフィは泣きながらエースとダダンが殿を務めていると伝えた。
「あのバカッ…」
思わず口調が荒れる。
ルフィたちに避難するように伝え、自分は全速力でエースとダダンの下へ向かった。
そこではエースとダダンが、ブルージャム海賊団船長のブルージャムと対峙していた。
エースもダダンも傷を負っているようだったが、それ以上に火傷がひどかった。
剃でブルージャムの懐に入り込むと、鉄パイプで思いっきり顔面を殴りつけた。
「エース、ダダン！何やってるんだ！行くぞ!!」
そう声をかけると、２人は我に返ったように動き出す。
念のためにブルージャムにもう2、3撃加えると、すぐにエースとダダンの後を追った。
「チっ…だめだ。こっちは道が塞がれてやがる。」
「こっちもだ…仕方ない。エース、ダダン！これからオレが全力で炎の一部に穴をあける！そこから走って逃げてくれ！」
そういうと死ぬ気の炎を手に集める。
父さんやじいちゃんのように炎すべてを薙ぎ払うことは不可能だが、一部に穴をあけることはできる気がした。
「大空の一撃《ソフィオ・ディ・チェーリ》!!」ボォッ!!
勢い良く突き出した手のひらから、オレンジ色の炎がほとばしる。
その炎は勢いのままに炎の壁に穴をあけた。
それを見届けるとともにオレは意識を失った。
――東の海《イーストブルー》 ドーン島　不確かなものの終着駅《グレイターミナル》 エース視点
「大空の一撃《ソフィオ・ディ・チェーリ》!!」ボォッ!!

リベルが放った一撃で炎に穴が開いた。
よくやったとリベルのほうを見ると、リベルは前のめりに倒れていくところだった。
「「リベル!!」」
ダダンと声が重なる。
たおれたリベルを担いで俺は急いで中間の森の川へと急ぐ。
「絶対に死なせねぇからな!!」
―次の日
川のそばにリベルを置き、ダダンに看病を頼むと街へと向かった。
街で薬と食料を盗んだ俺は、急いでリベルの下へと戻った。
リベルとダダン、そして自分の怪我の手当てを済ませると、ダダンが話しかけてきた。
「エースお前…あの時なぜ逃げなかった…」
「時々…カッと血が上るんだ…逃げたら何か…大きなものを失いそうで恐くなる…あの時は…俺の後ろにルフィがいた。わからねぇけど多分そのせいだ…」
そう答えると、ごそごそと起き上がる音がした。
そっちを向くと、リベルが起き上がっていた。
「リベル!リベル大丈夫か!」
「…大丈夫だ。ここは…?」
「ここは中間の森の川のそばだ。明日にはダダンの家に戻るぞ!」
「そうか…おれはまた何もできなかったんだな…」
そうリベルが言う。
何を言っているのか理解できなかった。
リベルは俺とダダンを助けに来てくれたのに…
「何言ってるんだお前!俺とダダンを助けに来てくれたじゃねぇｋ
「おれは!!」
リベルがおれの言葉を遮る。
こんなにも大声を出すリベルは初めて見た。
「おれは…何もできてないよ。あの日おれが一緒にいればサボは連れて行かれなかったかもしれない。おれが最初からブルージャムと

戦っていればこんなにみんながけがをしなくてもよかったかもしれない。おれがもっと強ければ火を薙ぎ払えたかもしれない!!おれは……弱い!!!」

そう大きな声で叫ぶと、リベルは意識を失ったように倒れた。

慌てて駆け寄ると、リベルは眠っていた。

その顔はどこか苦しそうだった。

――――東の海《イーストブルー》ドーン島　ダダンの家　リベル視点

目が覚めると布団の上に寝かされていた。

起きたおれを見て、ルフィが泣きついてくる。

どうやらダダンの家まで戻ってきたみたいだ。

「じんばいじだんだぞぉ～～」

と泣くルフィを見て、彼の祖父であるガープを思い出す。

濁点が多くつくようにしゃべるのが彼の一族の特徴なのか?とくだらないことを考えていると、外から慌てたような声が聞こえる。

ダダンの子分の一人であるドグラが帰ってきたようだった。

すると、ダグラが訳のわからないことを言い出した。

サボが…サボが…?

サボが…「死んだ…?」

サボは貴族の家にいるはずだった。

サボは幸せに暮らしているはずだった。

サボは…サボは…

声が出なくなった。

涙も驚きのあまり出てこなかった。

心が、頭が現実を受け入れることを拒否していた。

だって、サボは…サボは!

あてもなく森をさまよう。

海が見える崖にたどり着いた。

呆然と海を眺めていると、サボの手紙を持ったエースが近づいてきた。

サボの手紙を読み進めるとある一文が目に入った。
「……誰よりも自由な海賊になって、また兄弟４人どこかで会おう。広くて自由な海のどこかでいつか必ず!!それからエース、おれとお前はどっちが兄貴かな。長男２人、弟２人。変だけどこの絆は俺の宝だ。リベルのやつはしっかりしてるようで、どこか抜けてて危なっかしいし、ルフィのやつはまだまだ弱くて泣き虫だけど、おれたちの弟だ。よろしく頼む!!!」
その文章を見て、サボがいなくなったことを心が受け入れ始めた。
目からは涙がこぼれ、鼻水も止まらなかった。
大雨が降りだして、すべてを洗い流していくようだった。
大声をあげて泣き出すのと同時に、全身から青色の炎が吹き出してきた。
その炎は、自分を慰めるように。
サボのことを弔うかのように。
すべてを洗い流すかのように優しく燃え続けていた。
それはまるで、流れた血を洗い流す鎮魂歌《レクイエム》の雨のように。

大海賊編
新たな出会い

――――東の海《イーストブルー》 セッテ島　リベルの家　リベル視点

サボがいなくなって3カ月が経った後、じいちゃんが迎えに来た。話を聞くと、偉大なる航路《グランドライン》をいろいろ旅してきたらしい。

その過程で何人かの仲間が増えたみたいだった。

東の海《イーストブルー》に帰ってきたときに、ボロボロの状態でほぼ息をしていなかった女性を拾ったらしい。

母さんの炎のおかげで一命はとりとめたらしいが、よほどひどくやられたのかいつ目が覚めるのかもわからない状態らしい。

……やはりこの海は残酷だ。

何処までも自由に生きるのならば、力はどれだけあっても足りないかもしれない。

力こそがすべてだ…

自分の無力さに嫌気がさしていたおれは、今まで以上に修行に取り組んでいた。

体が出来上がっていない今、死ぬ気の炎を使った鍛錬は禁止されていたため、父さんや母さん、じいちゃんが得意な武器術や体術を教わった。

他にもガープの爺さんから昔教わった、六式の習得にも勤しんだ。

そのまま修行を続けて4年が経った。

――――東の海《イーストブルー》 セッテ島からほど近い無人島

「ハァッ…ハァッ…」バタリ

前のめりにリベルが倒れる。

その体には無数の傷ができており、そこで行われていた戦闘が生半可なものではなかったことを示している。

たおれたリベルの正面には、これまでリベルの相手をしていたジョットが無傷でたたずんでいた。
「…肉体面は出来上がりつつあるな。六式の出来も悪くはない。俺達が仕込んだ戦闘技術も、あとは自分で伸ばしていく領域までもっていった。」
ジョットはそう告げる。
リベルは倒れ伏しながらも、ジョットの言葉に耳を傾けた。
「最後の仕上げだ。お前に〝時雨蒼燕流〟の継承を行う。この継承は一度しか行われない。心して目に焼き付けろ。」
そういうとジョットは巻藁を準備しだした。
一つの巻藁を設置した後に、それに向かって紫色の炎…〝雲の炎〟を放出し、合計で九つの巻き藁を作成した。
その間にリベルは、何とか体を起こして目に焼き付けようとしていた。
そして、数分後。
巻藁は霧散し、唯一オリジナルの巻藁のみが残った。
時雨蒼燕流の継承は終わり、あとはリベルが己を高めていくのみとなった。
「これをもって、基礎修練および戦闘技能の基礎訓練を終了とする。以降は死ぬ気の炎を使っての訓練及び戦闘を許可する…よく頑張ったな、リベル。」
そういってジョットがリベルの頭をやさしく撫でる。
そのねぎらいに安心してか、はたまた戦闘訓練の厳しさゆえか、リベルは意識を失った。
「だがなリベル…今のお前に死ぬ気の炎がうまく扱えると、俺は到底思えないよ。」
すでに意識を失ったリベルに、その声は届かなかった。
そんなリベルをジョットはもう一度撫でると、そっとリベルを抱えてセッテ島まで飛んで行った。

――――東の海《イーストブルー》 セッテ島　リベルの家

ガツガツガツガツッ

そんな効果音が聞こえてくるほどの勢いで、リベルは食事を急いでとっていた。

それは傷を癒すためでもあったし、失った体力を取り戻すためでもあった。

彼らの一族が扱う特殊な炎…〝死ぬ気の炎〟と呼ばれるそれは、生命力を炎として顕現させ扱っているため、戦闘で失う体力は人一倍多かった。

そのため一族では、死ぬ気の炎を修得するよりも先に、〝生命帰還〟という技術の修得が必須であった。

なお、死ぬ気の炎に対しての才能がずば抜けていた…不自然なほどにずば抜けていたリベルは、生命帰還を修得する前に死ぬ気の炎に目覚めてしまっていたわけだが、ここ４年の修行によってリベルは無事に生命帰還を体得していた。

その技術を用いて己を回復するために、リベルはむさぼるようにして食事をとっていた。

そんな彼の下に、彼の祖父が訪れた。

「リベル。まずは基礎訓練の終了を喜ぼう。よく頑張ったな。それでじゃ、頑張った褒美に、お前をある人物に合わせてやろうと思う。お前が会いたいと言ってやまなかった大海賊じゃ。行くか？」

そう祖父が尋ねる。

リベルは食事の手を止めずに「行く！」と元気よく答えた。

すると祖父は続けて

「明日には出航する。奴がいるのは偉大なる航路《グランドライン》後半の海、【新世界】じゃ。我々は赤い土の大陸《レッドライン》の上を通っていく。申請もとうに住んでおるから、準備だけしておけ。」

そう言い残すと彼は去っていった。

残されたリベルは食事を勢いよく終えると、急いで準備に出かけた。

…その場に食事の残骸を残して。

その光景を見た彼の母の怒りは相当なものだったようで、リベルはもう一度食事をとることを余儀なくされた。
のちにリベルはこう語ったという。
「人生において最も恐ろしかった瞬間は、間違いなくあの時だった。自分のありとあらゆる手段が読まれて、傷一つすら付けられないほどだった。あの時の経験に比べると、すべての戦闘に恐ろしさは感じないだろう。」

――東の海《イーストブルー》 セッテ島　船着き場　リベル視点

「じゃあ、行ってきます!」
「気を付けていくんだぞ」
「なぁに、この儂がいるんじゃ。そこらの海賊なんざ触れることもできんままに終わる。任せておけ、ジョット。」
とじーちゃんが嵐の炎を灯らせながら言う。
こんなにも気合の入っているじーちゃんはおれが正式に弟子入りをした時以来かもしれない。
―回想　4年前　リベル視点―
3カ月が経って自宅に戻った後、すぐさま話があると言って家族たちを集めた。
「おれを…おれを強くしてほしい。」
そういって地面に頭をこすりつけるおれを見て、家族は困惑しているようだった。
「今までもお前に修行はつけてきただろう?それじゃダメなのか?」
と父さんが尋ねる。
「それじゃダメなんだ。それじゃこの海を生きていけない。おれは…おれは誰よりもこの海を自由に生きてみたい。」
そう話すと家族の目つきが変わった。
おれがなぜそんなにも自由にこだわるのかと聞かれたので、自分の

体験した過去2年のこと、特に失ってしまった兄弟のことについて話した。
「この海はあまりにも残酷だ。どこまでもまっすぐだった、優しかったサボが力がないだけで命を落とした。おれよりも強い兄だった。そんなサボにさえも、この海は、この世界は牙をむいた。そんなサボの分まで、おれは自由に誇り高く生きてやりたい。」
そういうと家族は真剣な目をしていた。
そして一斉にため息をこぼすと、父さんがおれにこう告げた。
「いいだろう。お前に修行をつけてやる。ただし、お前にはまだまだ足りないものがある。それが身につくまで死ぬ気の炎の修行は禁止する。これが守れないのならば、修行は即座に取りやめる。いいな！」
そう告げた父さんに勢いよく返事を返すと、家族は微笑んだ。
特にじーちゃんがやる気を見せていて、自分の持ちうる技術をすべて伝承するのだと張り切っていた。

――――偉大なる航路《グランドライン》後半の海【新世界】　とある島の前　リベル視点
「…じーちゃん、あの島に留まってほしい。」
おれの口からそんな言葉が飛び出て思わず驚いた。
偉大なる航路《グランドライン》に来るのは初めてで、ましてや新世界など想像もつかない。
ただ、どうしてもあの島には寄らないといけない気がしていた。
「どうしたんじゃリベル。」
そうじーちゃんが尋ねる。
「おれにも分からないんだ。ただ、あそこには寄らないといけない気がする。それだけは確かなんだ。」
そうおれが告げると、じーちゃんはとても驚いたようだった。
「ならば、あの島に行こうか。」
そうじーちゃんが答える。
おれはじーちゃんを驚きの目で見つめた。

「いいの？」
「あぁ、もちろん。あの島にどうしても行かないといけないんじゃろ？それはな、ジョット側の一族の血に宿るもの。ブラッド・オブ・ボンゴレ。超直感と呼ばれるものじゃよ。」
「超直感？」
「簡潔に言うと物凄い直感ということじゃよ。それがあの島を示してるんなら、行ったほうがええわな。」
そういうと船はすぐにその島へと身を寄せた。
島へ近づくとすぐに誰かがおれを呼んでいる気がする。
自分の超直感とかいうやつを信じて、まっすぐにその方向へと突き進む。
するとそこには衰弱した猫と、その子供であろう子猫がいた。
「君がおれを呼んだのかい？」
と猫に尋ねる。
猫はニャアとか細く一声鳴くと、ゆっくりと目を閉じた。
寿命のようだった。
子猫の悲しげな声が響いていた。
ゆっくりと猫へ黙祷をささげた後に、子猫へと向き直ると目線を合わすようにかがんだ。
子猫はすでに泣き止んでいた。
まだ悲しげだったが、その眼には強い意志を宿しているようだった。
「おれと一緒に来るかい？」
その言葉が口から零れ落ちた。
大切なものを失った同情心なのだろうか、同族を哀れんだのだろうか、それともその眼に惹かれたのだろうか。
理由はともあれ、おれの口から出た言葉は紛れもない本心だった。
子猫はニャアと一声鳴くと、おれの肩へと飛び乗った。
どうやら一緒に来てくれるらしい。
おれは子猫に〝ラタ〟という名前を付けて船へと戻った。
「ほう…メイキャットか、とんだ希少種になつかれたな。」

「メイキャット?」
「この子猫の種類じゃよ。信頼のおけるただ一人にのみそいつに合わせた道具を作るという猫じゃ。昔に大量に乱獲されての、もう存在すら危ぶまれていたんじゃが…まさかこの目で再び見ることになるとはな。」
「再び…?」
「あぁ…過去のトゥリニセッテも飼っていたんじゃよ。儂の祖父が飼っておった。」
「ラタは飼うんじゃないよ。おれと対等だ。こいつとは親友になれる。そんな気がしてやまないんだよ。」
「…そうか。ラタというんだな。悪いことを言った。リベルは少し頼りないが、支えてやってくれ、ラタよ。」
そういうとラタはニャアと一声鳴いて船の中を冒険しに行った。
なかなかにマイペースな奴だ。
「さて、出航するぞ。」
じーちゃんがそう言う。
自分のわがままで時間をとった手前、急いで船へと乗り込んだ。
船が出航するとじーちゃんが声を張り上げる。
「目的までもう少し。行くぞ!行先はモビー・ディック号、〝白ひげ〟の船じゃ!」

〝白ひげ〟　エドワード・ニューゲート

――偉大なる航路《グランドライン》後半の海【新世界】　リベル視点

「見えたぞ、あれがモビー・ディック号じゃ。」

その言葉の通り、目の前にはクジラのような船があった。

船からは言いようのない偉大さというか、威圧感というか、形容しがたい何かが発せられている気がして、ただただ圧倒されていた。

「ニューゲート、儂じゃ！」

じーちゃんが大声でそう叫ぶ。

すると、中から炎を纏った鳥が飛んできた。

よく見るとそれは、両腕が翼になった、パイナップルのような頭をした人だった。

「よくきたよい、〝大嵐〟。親父がお呼びだ、ついてくるよい。」

そういうと船へと案内された。

中には大量の船員が両脇に控え、中心には白いひげを蓄えた大男が堂々と座っていた。

「グララララ！久しぶりじゃねぇかティモ！何しにきやがった！」

「今日は引率じゃよ。孫がお前を一目見たいと言っておったからな。」

その言葉を聞いた大男――大海賊〝白ひげ〟はこちらに意識を向けた。

「ほぅ…てことはこいつが〝紫天〟と〝晴姫〟の息子か…名前は何だ。」

「リベルだ。トゥーリ・D・リベル。こいつは〝大空〟持ちだ。だからお前を見せに来た。」

「グララララ!!俺に孫の成長を手伝えってことか！…甘ったれんじゃねぇぞアホンダラァ!!!」ゴウッ

白ひげを中心に激しい威圧感がおれを、周囲を襲った。

自分で意識するでもなく、全身が〝死〟を覚悟したのか、死ぬ気

モードに体が勝手に入った。
今までで一番の出力の炎が額からほとばしる。
それでも崩れ落ちそうになる体を必死に支えていると、隣のじーちゃんからも同等の威圧感が発せられて中和された。
「結論を急くなニューゲート。お前に求めるのは、リベルを少しの間船におくことだけだ。手土産ならある。」
そういうとじーちゃんは持ってきた酒を取り出した。
白ひげはにやりと笑うと、杯を手に取った。
「いいだろう！ただし、そいつが船においておく価値があるかを示してからだ!!…マルコ！相手してやれ。」
そういうと、先ほど迎えに来たパイナップル頭の男が前に出てきた。
「親父ぃ、正気かよい。こんなガキを相手に戦えっていうのか。」
その言葉は、厳しい修行を乗り越えたおれのプライドを逆なでするような発言だった。
しかし、同時に現実も見えていたおれは黙って口をつぐむしかなかった。
「いい、相手してやれ。そいつはお前の言葉が偉く気に入ってねぇみたいだ。派手にやれ！グララララララ！」

――偉大なる航路《グランドライン》後半の海【新世界】　名もなき島
栗色の髪をした少年―リベルと、パイナップル頭の男―マルコが相対している。
「ほんとにやんのかよい…」
とどこかやる気なさげなマルコに対して、リベルはやる気に満ち溢れていた。
憧れの海賊の前で無様をさらすことはできないという思いがあったし、何より先ほどの言葉が頭に来ていた。
「審判は儂が務める。何があっても死ぬことはないようにしてやろう。リベル、本気でやれ。」

その言葉と同時にリベルが駆け出す。
額にはすでに炎が灯っており、修行で体得した剃を使って急速にマルコとの距離を縮めた。
「指銃！」
勢いよく指を突き出す。
マルコはそれをこともなげによけた。
「嵐脚！」
今度は蹴りから斬撃をとばす。
しかしマルコはそれをひょいと軽くかわした。
「動きはなかなか悪くねぇよい。今度はこっちから行くぜ！」
そういうとマルコの拳が迫る。
「紙絵。」
とっさにかわすが何度も連続で放たれる拳を交わしきれなくなってきた。
ついに一発を腹に食らってしまいそのまま吹き飛んでいく。
しかし、マルコは飛んだ先をじっと見つめたままであった。
「…チッ、さすがに騙されないか。」
とリベルは無傷のままで空を跳ねていた。
「海軍や政府がよく使う体術かよい。鉄を殴ったみてぇだった。」
そういうマルコの言葉を無視してリベルが飛び掛かる。
素早く攻撃を仕掛けるが、すべてがかわされていく。
息も絶え絶えになったリベルは勝負に出た。
「全部かわされるなら、かわせなくするまでだ！」
そういうと、無造作に嵐脚を放ちだす。
斬撃と同時に駆け出すと、勢いよく拳を突き出した。
「獣厳〝空砲〟」
突き出された拳に押し出された空気の塊が、勢いよくマルコを襲う。
それらを淡々とかわしていくと、周りは嵐脚だらけになっていた。
「これで仕留める！」
そういうとリベルは右腕に炎を滾らすと、マルコに向けてまっすぐ

放った。
「大空の一撃《ソフィオ・ディ・チェーリ》!!」
勢いのある炎に前が見えなくなっていた。
リベルはその手に確かな手ごたえを感じていたが、首筋に強い衝撃が走る。
「俺に能力を使わせるとは…なかなかの腕前だったよい。」
そういうマルコの腕は翼に変じていた。
翼で防御をした後、後ろに回って強い一撃を加えたのだった。
「勝負あり!マルコの勝ちじゃ。」
その言葉を最後に、リベルの意識は落ちて行った。

――――偉大なる航路《グランドライン》後半の海【新世界】 モビー・ディック号 リベル視点
意識が急浮上する。
外では何やら話し声と、大きな笑い声が聞こえてきた。
「…あれ?」
…知らない天井だ。
当たりを見渡すと、船の一室のベッドで寝かされているようだった。
外に出て声のする方向へと進む。
すると、白ひげ海賊団とじーちゃんたちが宴をしてた。
「目ぇ覚ましたかよい。大丈夫か?」
マルコが酒を片手に尋ねた。
左腕には先ほどまでなかった包帯が巻かれていた。
「大丈夫だよ。その腕は?」
そう尋ねるとマルコは苦笑いをした。
「これはお前さんの一撃の後だよい。ちょっと受けきれなかったみたいだ。なかなか強かったぜ、お前。」
そういうとおれの頭をガシガシと撫でる。
乱暴な手つきだったが決して嫌ではなかった。
「…悪かったな。」

マルコがそういう。
何を言っているのかわからなかった。
自分を気絶させたことへの謝罪だろうか？
そう考えているとマルコは話を続けた。
「お前をガキだと侮ったことへの詫びだ。お前は俺にちゃんと一撃加えてるよい。」
そういって包帯を掲げて見せる。
途端に模擬戦での敗北が脳裏によみがえり、悔しい気持ちがあふれ出した。
「…でも、おれは結局一撃しか与えられなかったよ。」
そうふてくされて言うと、マルコはにっこりと笑った。
「はっはっは。俺はこれでも1番隊隊長だ。簡単には当たってやんねぇよい。俺に一撃あてたことをむしろ誇るべきだぜ。」
そうマルコは言うが納得いかなかった。
いずれ絶対に勝ってやると息巻いていると、おれを呼ぶ声が聞こえた。
そっちに行くと、じーちゃんと白ひげが酒を飲んでいた。
「…じゃからリベルはまだ……!?おう、リベル！来たか。」
「おれがどうしたの？」
「ニューゲートのやつの面倒を見てもらうにあたって、お前のことを話してたんじゃよ。なぁ、ニューゲート？」
「ああ。お前…リベルだったか。マルコに一撃入れたんなら大したもんだ。俺の船に少しの間乗せてやる。ただし！俺らは教えねぇぞ。勝手に学んでいけハナタレ。」
「そういうことじゃ。船を降りるまでにマルコに攻撃をまともに当てれるようになっておくんじゃな。すべて読み取られておったぞ。」
「しっかり経験を積んで強くなるよじーちゃん。おれは強くならなきゃいけねぇ。」
「…そうじゃな。」
そういうじーちゃんの顔は少し寂しそうに見えた。
「なんでおれあんなに見切られたんだろう。」

慌てて話を変えるように話題を振る。
それにきょとんとしたじーちゃんは口を開いた。
「それｈ「そいつは〝覇気〟だ。」ニューゲートォ…」
じーちゃんが恨みがましい目で白ひげを見つめる。
それを意にも介さず白ひげは説明を続けた。
「覇気には三つの種類がある。実態をとらえ、自分に鎧のようなものを纏う〝武装色の覇気〟。気配を感じ取り、時には相手の思考をも読み取る〝見聞色の覇気〟。お前が攻撃をかわされまくったのはこれが原因でもある。ここまでは誰しもが持つものだが、最後の一つは違う。数百万人に一人しか持たねぇと言われている〝王の資質〟、〝覇王色の覇気〟だ。こいつはお前のジジイも父親も持ってるもんだ。お前さん、〝大空〟だろ？ならお前さんも持ってる。」
「覇気か…」
実をいうと伸び悩んでいた。
父さんや母さん、じーちゃんはおれに優しく、修行は厳しいものであったがどこかで加減が見られた。
それはじーちゃんと白ひげの最初の威圧感…覇王色の覇気のぶつかり合いではっきりと分かった。
自分に必要な技術だとおれの超直感も囁いていた。
だから…
「おれに覇気を教えてください!!」
勢いよく頭を下げる。
すると白ひげは大笑いをしたのちに、覇王色の覇気をおれにぶつけた。
「グララララ!…甘えるなよハナタレ。俺は盗めと言ったぞ。この俺から奪って見せろ!」
一歩も動けなかった。
ただ、ここで飲まれるとおれはもう立てなくなると超直感が告げていた。
止めようとするじーちゃんを目で制すると、まっすぐに白ひげを見つめる。

「それでもいい…それがいい!!あなたから全ての技術を、力を盗んで見せる!だから…これからよろしくお願いします!!」
死ぬ気モードになって深々と頭を下げる。
それを見た白ひげがどんな顔をしているかはおれにはわからない。
ただ、頭を下げ続けた。
いつの間にか宴の声は鳴りやみ、全員がおれたちを見ていた。
「よく言って見せた!いいだろう、今日からこいつはおれたちの船に乗せる!野郎どもォ!!酒を掲げろ!宴だぁぁあああ!!」
その声とともに白ひげがグララと大笑いする。
爆発したような歓声が船を覆い、宴が再開された。
今日からおれは、この船で力をつけて強くなってやる!!

覚悟とは？

――――偉大なる航路《グランドライン》後半の海【新世界】　モビー・ディック号　リベル視点

コンッ「…クソッ」

「また外れだよい。もっと気配を読むんだな。」

目隠しをしたまま悪態をつく。

軽く頭をたたかれた回数はもう数えていない。

最初のころに強く頭を狙われていた時は、自分の超直感が反応してすべて回避してしまっていた。

なので、危機感のない見聞色の覇気の訓練はとてつもない行き詰まりを見せていた。

一方武装色の覇気は、これもまた苦戦していた。

見えない鎧を纏おうとすると、死ぬ気の炎があふれ出てしまうのだった。

「困ったよい。お前ぐらいの才能ならすぐに修得すると思ってたんだがな…」

マルコがそういう。

そんなこと言われても…と思う自分がいると同時に、これ以上ない悔しさが自分の中で湧き上がっていた。

「見てなって…すぐに修得して見せるから！」

そう見栄を張ってみる。

しかし、修得につながる方法は一向に見出せず途方に暮れていた。

その時、自分を呼ぶ声が聞こえた。

「おいハナタレ！ちょっと来い。」

白ひげに呼ばれたおれは素直に顔を出した。

そこではじーちゃんが不機嫌そうに、白ひげが愉快そうに座っていた。

「お前、覇気をものにできていないんだってな。」

白ひげがそう尋ねる。

悔しい気持ちをぐっと抑えて「そうです。」と答える。

すると白ひげはさらに言葉を続けた。
「お前、覚悟をはき違えてねぇか？お前の覚悟は一体なんだ？」
「…強くなることだけど。」
「そいつは手段だ。目的じゃねぇ。お前は何で強くなりてぇんだ。」
「サボの、死んだ兄貴の分まで自由に生きてやること。」
そう答えると白ひげは目を丸くする。
そして優しい目をしながらさらにつづけた。
「今のお前じゃあ死ぬ気の炎は十分に扱えねぇよ。ただ、扱えねぇ理由は自分で気づくべきもんだ。おれの口からは言えねぇし言わねぇ。ただ、覇気の使い方は簡単に教えてやろう。ティモが頭を下げたからな。グララララ！」
そういうと白ひげは、目の前で実際に武装色の覇気を纏って見せた。
そして、おれに攻撃を加えるかのような勢いで振りかぶってきた。
死ぬ気モードになったおれは勢いよく後退し、観察を続ける。
白ひげは超直感での読みが間に合わなくなるペースで攻撃を仕掛け続けた。
それを超直感や鉄塊、紙絵も併用した回避術でかわしていったが、紙絵でかわそうとした瞬間に超直感が猛烈な警告を発した。
後ろにラタがいた。
この攻撃を全霊ではじけなければラタか自分が死ぬ。
そう思える攻撃を白ひげが仕掛けた時に、超直感が生き残る方法を感じ取った。
全力で武装色を纏いながら白ひげの攻撃の軌道を読み、腕を上にはじいた。
その後後ろ向きに倒れ伏した。
ラタが心配そうに駆け寄りおれの顔をなめる。
息が絶え絶えになる中、白ひげが大きく笑った。
「グララララ！そいつが覇気だ！死ぬ気の状態で纏っちまえば違いも分かるだろ！見聞色も使えるようになったみてぇだし、その感覚を磨き続けるんだな！」

そういって船室に戻っていった。
「ラタ…絶対に見返してやろうな…」
心配そうにすり寄るラタを抱えて、おれはそうつぶやいた。
それに呼応するかのようにラタが鳴くのが聞こえた。
全身の疲労を自覚したおれは、睡魔に身を任せて意識を閉ざした。

――1年後
「鶴爪《オングル》！」
「武装硬化…大空の一撃《ソフィオ・ディ・チェーリ》！」
ドォォォオオン！
「手加減してるとはいえ、おれの一撃を相殺するとはなかなかやるようになったよい。」
「ゼェッゼェッ・・・よく言うよ。こっちは死ぬ気をほぼ振り絞った武装色込みの全力！マルコは手加減に手加減を重ねた撫でるような一撃じゃないか！」
「そんだけできれば上等だよい。その年でこいつを相殺できる奴が何人いるか…」
「武装硬化も短時間しかもたないし、見聞色も範囲は狭いし、死ぬ気の炎に至っては伸びる未来が見えてない！…俺、これ以上強くなれるのかな。」
「なれる…とは言えねぇよい。お前の場合は心の持ちようだ。親父に言われたことをよく考えることだよい。」
「…それが分かったら苦労しないよ。」
そういうとマルコは笑顔を見せる。
弟を慈しむかのような表情は、昔サボがおれによく見せていた表情だった。
「…サボ。」
思わずそうつぶやく。
するとマルコが「サボ？」と聞き返してきた。
しまった！と思いつつも、自分の身の上を話してみる。
するとマルコは同情するような、それでいて激励するかのような表

情を浮かべた。
「お前が何のために強くなろうとしてるかはわかったよい。ただ、そいつが本当にお前にそう望んでいるのか、じっくり考えてみることだな。」
そういうとマルコは去っていった。
マルコが何を言っているのかいまいち分からなかった。
分かりたくなかったのかもしれない。
ただ、ズキリと頭の片隅が痛んだ。
気分転換に船長室を訪れる。
1年もたった現在では、白ひげをもう一人の祖父のように慕っていた。
「なぁじーさん。おれって覚悟を間違えてるのかなぁ。」
そう白ひげのじーさんに尋ねる。
じーさんは軽く笑いながらおれに話しかけた。
「グララララ。覚悟に間違いも何もねぇよ。覚悟ってのはテメェがそれぞれ心に秘めた自分のもんだ。そいつをよく覚えておくんだな。」
そう言いながら酒を飲む。
「じーさん。体に障るよ。」
と言いながらもじーさんやマルコが言ったことが頭を駆け巡っていた。
「…今は答えを出せそうにないや。」
そういうとじーさんはにやりと笑って俺に語り掛ける。
「グララララ!それでいいぞ、リベル!時間をかけて答えを出すもんだ。生き急がなくてもおのずと答えが出るもんだ。」
そう言いながら大きな手で俺を撫でる。
じーさんの手は大きく、心地よい手だった。
「絶対にじーさんに追い付いて見せるからな!」
そういうと船長室を出る。
そしてじーちゃんに話しかけると、死ぬ気の炎の修行をつけてくれとねだりに行った。
――さらに1年後　リベル14歳

ついにモビー・ディック号を離れる時が来た。
どうしても寂しい気持ちは抑えられなかったが、お世話になった船員1人1人に挨拶をして回った。
「ありがとうサッチ。ご飯おいしかったよ。」
そういうとサッチは満面の笑みを浮かべて「また食べにこい！」という。
「サッチ。怪我とかに気を付けてね。おれの超直感がすごい警鐘を鳴らしてるから。」
サッチにそう伝えると、サッチは「気を付ける。」と表情を引き締めた。
次にマルコと話す。
「マルコ、次に会うときはマルコに並んで見せるから、そん時はまた勝負してね。」
「おう！リベルは強くなったな！もうちょい体が成長すりゃもっとお前の強みが活きる。武器術も様になってくるだろうよい。」
「…これはじーさんにも言おうと思ってるんだけど、ティーチには気をつけてね。超直感がすごく警鐘を鳴らしてるんだ。…おれも仲間を疑いたくないんだけど、ティーチには目を配っておいてね。」
「…それでも仲間は疑えねぇよい。ただし、お前の超直感は本物だ。頭の片隅にはおいておいてやるよい。」
最後にじーさんに声をかける。
「1年間お世話になりました、じーさん。じーさんの船に乗ったこの2年は忘れられない思い出になると思う。じーさんはおれの目標の一人になったよ。絶対に追い付いて追い越せるような漢になる。…覚悟はまだよくわかんないけど。おれはおれなりの答えを見つけてみせるよ。」
そういうと白ひげは「グララララ！」と笑う。
「思う存分悩め！リベル、お前はまだ世界を知らねぇ！この海は広い！お前の答えはこの海にあるだろう。この俺が保証してやる！」
そういうと酒を浴びるように飲み始めた。
「じーさん、ほどほどにね。」

と声をかけながらじーさんに近づく。
おれの真面目な表情に気づいたのか、じーさんも真面目な顔をする。
「じーさん。おれは今からじーさんを怒らせることを言うよ。おれの超直感が、ティーチに警鐘を鳴らしてる。…仲間を疑うのはよくないことだけど、これだけは伝えたくて。」
するとじーさんは顔に井形を浮かべる。
そして低い声でおれに語り掛けた。
「リベル。お前は紛れもなくおれの家族だ。…だがな、ティーチもおれの息子に変わりはねぇ！俺は家族を疑わねぇ…が、トゥーリ一族の超直感だ。ティモも俺に同じことを言ってきやがった。…頭の片隅にはおいておいてやろう。」
そういうとまた酒を飲み始めた。
申し訳ない気持ちと、後味の悪い別れになってしまったと若干の後悔をしながらモビー・ディック号を発つ。
すると、目の前に海賊船が現れ襲い掛かってきた。
ドォーン「奪え！殺せ！相手はジジイとガキ、若い奴が何人かだ！俺達【黒豹海賊団】の敵じゃねぇ！」
そういいながら船を寄せようとしてくる。
その時バリバリバリッという音がすると、目の前で船が沈んだ。
振り返ると、じーさんが薙刀を振りかぶって立っていた。
「いってこいリベル！これからがお前の冒険だ！」
そうやってじーさんは叫ぶと、振り返って船に戻っていった。
おれは上を向いて零れ落ちそうになる涙をグッとこらえた。
そして、船が見えなくなるまで大きく手を振り続けた。
そうして、おれがセッテ島に帰ってから４年の月日が経った。

原作開始前のキャラ紹介

原作開始時点でのキャラクター

主人公

名前：トゥーリ・Ｄ・リベル

性別：男性

年齢：１４歳→１８歳

身長：１８６ｃｍ

体重：

死ぬ気の属性：大空、雨

特殊技能・生命帰還、六式（六王銃未修得）、武装色の覇気（武装硬化は１時間もつくらい）、見聞色の覇気（範囲はエネルと同程度、精度は広範囲の場合劣る）、時雨蒼燕流（継承済み）

使用武器・格闘、刀、トンファー、槍（棒術）、弓、銃（ガン・カタ）、死ぬ気の炎

本作の主人公。ルフィの船出の一年前に旅立とうとしていたが、時雨蒼燕流の継承が思い通りにいかず１年遅れた。死ぬ気の炎は死ぬ気モードまでしかうまく引き出せていないが、この段階である程度死ぬ気の炎を攻撃として転用で来ている時点で、死ぬ気の炎を扱う才能がずば抜けているのが分かる。故郷が東の海《イーストブルー》にあるためそこから旅を始めているが、実力で言えば偉大なる航路《グランドライン》レベル。自分探し中。ルフィの好きにさせることがほとんどで、命に関わらない限りは極力手を出さない方針の見守り型。実力は一味の中でも頭２つ以上抜けている。

武器得意ランキング

単体：格闘≧刀≧トンファー

多人数：銃≧槍≧トンファー

遠距離：弓≧銃≧死ぬ気の炎

一撃の重さ：弓≧刀≧トンファー

相棒

名前：ラタ
種族：メイキャット
性別：雌
特殊技能：道具作成、武器作成
本作の相棒枠。主人公の成長に伴い様々な道具や武器を作成してくれることがある猫。絶滅危惧種の希少種。家族を失った過去を持つが、すでに前を向いて歩んでいる。自他ともに認めるリベルの親友。よく肩に乗ったり、布団に潜り込んだりする甘えん坊。好きな食べ物は魚。リベルの死ぬ気モードを間近で長年見続け、大空の炎をこれ以上ないくらい浴びたため【調和】し、歴代のメイキャットの中でもずば抜けてリベルに向いたものを作る。また、ラタ自身もリベルに適応しようと積極的に炎を受け入れたため、半身かのような存在になりつつあり、主人公と見えないつながりがある。

家族
名前：トゥーリ・Ｄ・ティモ
続柄：祖父
性別：男性
身長：１９０ｃｍ
異名：大嵐
死ぬ気の炎の属性：嵐、大空、霧
ロジャー世代の大物。賞金稼ぎをしていた過去があり、当時の海では存在自体が恐れられていた。得意な武器は弓と銃、幻術。覇気は全てを満遍なく扱えるが、孫可愛さに本気で指導することが難しく白ひげを頼った過去がある。白ひげがじーさんと呼ばれるのに納得がいっていない。そのことで白ひげと大喧嘩をした際は無人島がいくつか消し飛ぶ結果となったが、横からリベルの一撃を白ひげともどもくらい喧嘩を終えた。引き分けに終わった大喧嘩は、海軍が大慌てする程のけんかとなり、あたり一面の海は一週間荒れ狂い続け、空は雲が寄ってこれないほどの快晴であり続けた。

名前：トゥーリ・Ｄ・ジョット
続柄：父親
性別：男性
身長：１８９ｃｍ
異名：紫天
死ぬ気の炎の属性：雲、大空、雨
自警団「トゥリニセッテ」の現ボス。自警団とは名ばかりで、依頼次第では要人警護も行う。得意な武器は刀、トンファー。覇気は全て強力で、覇王色の覇気は空間を軋ませる程。強いカリスマを持ち、仲間になるためにセッテ島までわざわざ訪ねてくるものも多い。愛妻家で親バカ。正義感が強いが海軍の正義とは分かり合えなかったため、独自の組織を率いている。困っている人を積極的に助けるタイプ。大抵の問題は実力でどうにかなる。一族の中でも超直感が鋭く、歴代最強と謳われている。守るべきものを守るために立ち上がった時は、大海賊と呼ばれたものを敵に回すことに何のためらいもない。

名前：トゥーリ・Ｄ・レイナ
続柄：母親
性別：女性
身長：１６８ｃｍ
異名：晴姫
死ぬ気の炎：晴、雷
リベルの母親。もともとは違う一族であったが、ジョットとの結婚を機に一族が合体。苗字をトゥーリに変えた。得意な武器は格闘、槍。守ることに関しては一族で最高の実力があり、レイナに一撃を与えられると一目置かれるようになるレベル。リベルは半日かけて全技術と覇気を用いた結果やっと有効な一撃を与えることができた。それでもまだ余裕があり、まともな戦闘をできるのは世界でも一握りの強者のみ。料理が得意で、リベルが生きて行けるように一通りの生活技術は仕込んだ女傑。普段のおっとりとした優しい性格とは裏腹に、怒った時は誰も逆らうことのできない修羅となる。

原作突入　東の海編

旅立ち

――――東の海《イーストブルー》 セッテ島　リベル視点

「じゃあ行ってきます。」

そう家族に声をかける。

みんなと別れるのは寂しいけど、それ以上に海への期待が大きかった。

じーさんやマルコ達みたいに、そして自警団のみんなみたいに絶対に強く生き抜いて見せる！

そんな意気込みがおれを早く旅立たせようとしていた。

「餞別だ…持っていけ。」

父さんが指輪と小さな箱をくれた。

箱には小さな穴が開いていた。

「こいつはセッテリング。もう一つは…秘密だ。時が来たらいずれ分かるだろう。それを楽しみにしておくんだな。」

と父さんが笑いながら言う。

じーちゃんは何か言いたげに、母さんはおっとりと笑いながらそれを見ていた。

「…行け！この海は広い。俺達はここに変わらずあり続けよう。リベル、君は君なりに世界を楽しんできなさい。」

父さんが言う言葉にはじかれるように船に乗った。

船ではおれの同行者がすでに準備を終えて待っていた。

「行こう、ベールさん！これからが冒険の始まりだ！」

「せっかちだねぇ…それも悪くない！行こうか、船長？」

ベールさんがタバコをふかしながらイタズラっぽく言う。

「いや、おれは副船長さ。そういう約束なんだ。」

そう言いながら帆を張る。

船首ではラタが気持ちよさそうに眠っていた。

２人と１匹を小型の船は、風を受けながらどんどんセッテ島から遠

ざかっていった。
――ジョット視点
「…行ったな。」
「…行ったわね。」
最愛の妻と話し合う。
息子が突然頭を床にこすりつけながら修行をつけてくれと頼んだ日には、家族会議さえしたものだとふと懐かしい気持ちがこみ上げる。
「…まだ、幼いと思っていたんだがな。」
思わず本音が漏れる。
自由に生きさせてやりたい反面、自分のようにつらい思いまではしなくてもいいのではないかという親心が、どうしても修行に加減してしまう理由でもあった。
「基礎は仕込んだ。弱い俺を恨んでくれても構わない。リベル、お前の覚悟を気づかせてやれなくて悪いな。」
言葉が止まらない。
万が一リベルに何かあればどうしようかという不安にさいなまれていた。
「大丈夫よ。」
妻の声が聞こえる。
どういうことかと顔を向けると、妻は穏やかな、それでいてまっすぐ強い力でこちらを見据えていた。
「大丈夫よ。私たちの子供だもの。あの子も自分で気が付かなくちゃ意味がないでしょ？」
そう言って笑いかける。
「本当にあなたたちはそっくりね。お義父さんもあなたも、そしてリベルも。悩んでしまっては立ち止まって、それでもゆっくりと前へと進んでいく。きっかけさえあればこっちを置いていくように飛んで行ってしまう。」
そういいながら妻は俺の額と自分の額をくっつけた。
妻の目以外映らない状態で妻は言葉を続ける。

「信じてあげなさい。あなたの子でしょ？」
私から離れて妻は笑いかける。
そんな妻の腰に手をまわして俺は言葉を発した。
「俺の、じゃない。俺達の、だ。…分かってるよ。あいつはきっと俺を超える。」
そう言いながら妻と笑いあう。
気が付くと周りでは仲間たちがこちらを茶化してくる。
そんな彼らに苦笑いしながら、すでに見えなくなったリベルたちのほうを一目見ると、踵を返して屋敷へと戻っていった。

――――東の海《イーストブルー》 とある海上　リベル視点

「さて、どこに行こうかリベル？」
そうベールさんが尋ねる。
ベールさんは何年か前に海で死にかけているのを、父さんが拾って母さんが治療した女性だ。
死にかけた際に記憶を失ったらしく、偉大なる航路《グランドライン》に入るまでは記憶を戻すためにおれと一緒に冒険することになっていた。
「どこに行こうか？フーシャ村に行ってマキノさんとかお世話になった人に挨拶しに行きたいけど…ドーン島には嫌な思い出があってね。なるべく行きたくないな。マキノさんには後で手紙を出すとして、腹ごしらえがしたいな。東の海《イーストブルー》で有名な海の上のレストランがあるでしょ？そこに行こう。」
そういうとベールさんは針路を変えた。
「バラティエのことだね。じゃあそこでご飯を食べて、次に行くところを決めようか。」
そう言いながら船はどんどん進んでいく。
しばらく進んだ先で、ボロボロになった魚のような外装の船があった。
「あれがバラティエ…敵襲でもあったのかな？」
「さぁ？ご飯が食べれれれば何でもいいわよ。」

そう言いながら2人で船へと入っていく。
すると禿げたいかつい男が席へと案内してくれた。
「注文は何にいたしやしょう。」
「「おすすめで。」」
「かしこまりやした。店内は御覧の通り少し荒れていやして。へぼいも失礼ではございやすが、お客様代金はお持ちでしょうか？」
「ああ、あるよ。海賊の襲撃かい？大変だね。」
そういうとウエイターは笑いながら注文を厨房に伝えに行った。
当たりを見渡すと確かに砲撃の跡や、大きな斬撃の跡がうかがえた。
「相当な剣豪でも訪ねてきたのかな。」
そういうとちょうど料理を持ってきたウエイターが答えた。
「へい。お待ちどうさまです。…あぁ、この傷は〝鷹の目〟が緑色の髪の男と決闘したときの余波でついた跡ですよ。」
「へぇ、〝鷹の目〟。世界一の大剣豪様がよくこんな海まできたもんだ。」
「クリークっていう偉大なる航路《グランドライン》で敗れた海賊を追ってきたみたいでして。麦わらのアルバイトが倒したおかげで事なきを得たんですがね。」
「麦わら？ルフィのことかい？」
そう尋ねるとウエイターはひどく驚いたように目を丸くさせた。
「あいつをご存じで？」
「あぁ、おれの弟だよ。あいつはどうだった？」
しばらくルフィのことで会話が弾んだ。
久々に聞く弟の話に、おれは笑いと喜びを隠しきれなかった。
「そうか！あいつも成長したんだな！ところで、あいつはどこに？」
食事を終えて会計をしながら、ふとルフィについて尋ねた。
すると、ウエイターはやや複雑そうな顔で答えた。
「ああ、どうやらオレンジ色の髪の仲間に船を奪われたらしくて。今はそいつを追ってココヤシ村とかいうところに向かったらしいですぜ。」

そう答えた瞬間に、ベールさんの血相が変わった。
「ココヤシ村!?あんた今ココヤシ村って言ったかい!?」
ベールさんが激しくウエイターを問い詰める。
ウエイターはしどろもどろになりながらも同じ言葉を続けた。
「悪いリベル。ココヤシ村に向かってくれないかい？」
必死な様子でベールさんがおれに詰めかける。
あまりにも必死なので、とりあえず会計を済ませた後に船へと飛び乗った。
「どうしたの？そんなに血相を変えて。」
そう尋ねるとベールさんは落ち着いたのか、少しずつ語り始めた。
「記憶が戻ったのさ。私の本当の名前はベルメール！私には娘が２人いて、そのうちの１人がそのオレンジ色の髪の子さ。私がいない間、どんな思いで過ごしてきたか…どんなに寂しかっただろうか！一刻も早くあの子たちの下へ帰りたいんだ。リベル、頼むよ。」
そういうとベールさん…ベルメールさんは深々と頭を下げた。
「いいよ、ベール…ベルメールさん。頭を挙げてくれ。…父さんがベール…ベルメールさんを連れて行けって言った理由が分かったよ。…相変わらず化け物みたいな超直感だな。」
そういうとベール…ベルメールさんは苦笑いをしながら「ベールでいいよ。むしろあんたらに呼ばれるならそれがいい。」と言った。
船は速いスピードで進み続け、コノミ諸島まであと半日というところまでたどり着いた。
ベールさんは激しく貧乏ゆすりをしながら、祈るように腕を組んでいた。
「ベールさん。目的地まで相当近づいたみたいだね。じゃあ帆をたたんでくれ。ちょっと裏技を使う。」
そういうと船尾へと向かった。
ベールさんはピンときたようで、すぐに帆をたたんでいた。
おれは海に向かって拳を振り上げると、大空の炎を纏いながら斜めに振り下ろした。
「武装硬化。獣厳併用。大空の一撃《ソフィオ・ディ・チェーリ》!!」

バッシャーン
次の瞬間、船が空を飛んだ。
勢いよく景色を置いていき、島がくっきりと肉眼で映る距離まで近づいた。
赤い巨大な建物から、草履をはいた長いあしが勢いよく建物を崩壊させるところだった。
「…なんかすごいことになってるね。…いや本当に、うちの弟がすみません。」
そう言いながらベールさんに頭を下げる。
ベールさんは煙草をふかしながら苦笑いをしていた。
どうやらルフィは、鮫の魚人を倒したようだ。
決着がついたと思われたその時に、ルフィを狙う二つの影があった。
「…まったく。無粋なことをする。ベールさん、オレは一足先に向かう。少し揺れるが我慢してくれ。」
死ぬ気モードになったオレはそれだけを言い残すと、勢いよく船を飛び出した。
「剃刀《カミソリ》!!」
超高速でルフィと二つの影の間に割り込むと、勢いよく拳を突き出した。

――――東の海《イーストブルー》 コノミ諸島 アーロンパーク
「大空の一撃《ソフィオ・ディ・チェーリ》!」
鮮やかなオレンジ色の炎がルフィたちの視界を染め上げる。
いきなり飛び込んできた栗色の影の一撃は、見ている者を魅了する程の美しさがあった。
攻撃に直撃した2つの影…クロオビとチュウは、勢いよく弾き飛ばされ、気を失った。
「詰めが甘いのは相変わらずか?ルフィ。」
栗色の影が振り返ってこう言う。
一足先に我に返ったルフィは、嬉しそうに叫んだ。

「リベル!!」
その声を聞いて栗色の影…リベルは、嬉しそうに「久しぶりだな、ルフィ!」と声をかけた。
こうして【麦わら】と【死炎】２人の義兄弟は、１０年ぶりの再会を果たしたのだった。

再会

――――東の海《イーストブルー》 コノミ諸島　アーロンパーク

リベル視点

「ところで、この村にノジコとナミっていう子がいると思うんだけど、どこにいるか分かる？」

死ぬ気モードを解いたおれは、風車を刺したいかつい男性にそう尋ねた。

すると男性は、どこか警戒した様子を見せながら答えた。

「なぜ君がその２人を知っている？」

そう尋ねるとこちらに武器を向ける。

明らかに警戒した様子のその男性の姿に苦笑いをしてしまう。

詳細を話そうと口を開くと、ルフィがおれに話しかけてきた。

「リベル、ナミのこと知ってんのか～！ナミはうちの航海士なんだ！」

「…へぇ、とんだ偶然もあるもんだ。じゃあルフィ、そのナミって子のもとに案内してくれ。話があるんだ。」

正直驚きを隠せなかったが、ベールさんの口から直接聞いたほうがサプライズになると考えて黙っていることにした。

すると風車の男性がこちらに詰め寄ってきた。

「話はすんどらんぞ！どうして君が２人を知っている？」

改めて話があることを伝えようとすると、ルフィがおれを遮って話し始めた。

「リベルなら大丈夫だおっちゃん！リベルは俺の兄貴だからな！」

そういうと周囲が驚きに包まれる。

特に緑髪の剣士や長い鼻の青年、金髪のぐるぐる眉毛は驚きを隠せないようだった。

「ルフィ！」

オレンジ色の髪の麦わら帽子をかぶった女性がルフィに駆け寄ってきた。

目には涙を湛え、今にも泣きそうな表情で駆け寄ってくる。

「ナミー!」
ルフィが嬉しそうに声をかける。
あれがナミか…どことなく雰囲気がベールさんに似てるな。
内心そう思いながら彼女に声をかける。
「あー、感動的な場面で申し訳ない。君がナミ?おれの名前はリベル。ルフィの兄貴だ。よろしく頼む。いきなりで悪いんだけど少し時間をもらえるか?君とノジコって子に合わせたい人がいるんだ。」
そう言うとナミがおれのほうに目を向けた。
訝しげな眼をしながら口を開いた。
「まずルフィたちを村に運んでからでいい?治療をしてあげたいの。」
「もちろん。それは優先してくれ。おれの弟なんだ、よろしく頼むよ。」
そういうと負傷者を連れて村へと戻っていった。

――――東の海《イーストブルー》 ココヤシ村海岸
リベル視点
「それで、会わせたい人って誰なの?」
村で宴会の準備が進んでいる中で、おれとナミ、ノジコと風車の男性―ゲンさんは海岸に来ていた。
最初は2人だけを呼ぶ予定だったが、まだ信用が薄いらしくゲンさんが付き添いでついてきた。
「もう少しで見えるはずだ。おれは先行してきちゃったからな。」
そう言うと薄っすらと船が見えた。
しかしそれはおれが乗ってきたものではなく、海軍の軍艦だった。
「チッチッチ。ここに手配書に乗っている海賊がいると聞いた。おとなしく引き渡してもらおうか。」
軍艦から降りてきたネズミのような男性（以降ネズミ）が、開口一番にそう告げた。
にやにやと憎たらしい笑い方をしている。
「…リベル。あんたが合わせたかったのってこれ?」

ナミが剣呑な様子で尋ねる。
それに合わせて、ノジコやゲンさんからもヒリついた空気が伝わってきた。
「そんなわけないだろ。…ほら、よく見てみな。」
沖合に船が見えたかと思うと、そこから人影が跳躍してこちらへと向かってきていた。
その人影は銃でネズミを殴り飛ばすと、銃口をまっすぐにネズミへと突き付けた。
「私の娘たちが世話になったみたいだね。ここで死んでおくかい？」
銃を突きつけた女性…ベールさんのさっきに耐えかねてネズミは意識を失う。
それを確認したベールさんは立ち上がると、振り返ってナミとノジコに抱き着いた。
「久しぶりだね、ノジコ、ナミ！」
「…ベルメール…さん？…お母さん!!」
そういうと3人は熱く抱擁を交わした。
隣ではゲンさんが信じられないものを見たような目をした後、そっと目頭を押さえて泣き出した。
それを横目で見ながら、おれは海軍の海兵たちを一人残らず簀巻きにして放置していった。

――東の海《イーストブルー》　コノミ諸島　ココヤシ村　リベル視点
それからベールさんは、長い間自身の身に起こったことを話した。
アーロンにやられた後海に捨てられたこと。
そこを通りがかった父さんたちに拾われて一命をとりとめたこと。
体が治っても記憶が戻らなかったため、父さんの下で働いていたこと。
おれの旅に途中まで同行するという軽い休暇のような任務の際、バラティエで記憶が戻ったこと。

そして今に至ることをすべて伝えた後、おれに向き直って深く頭を下げた。
「あなた方に救われてなかったら、今こうやって家族との再会を喜ぶことすらできませんでした。そこに深い感謝を。それと同時に身勝手をお許しください。私はもう、二度と家族から離れたくない。トゥリニセッテを辞職する。」
そういながら頭を下げ続けるベールさん。
おれはあえて重たい空気を出しながら、死ぬ気モードになってベールさんに口を開いた。
「頭を上げろベールさん…いや、ベルメール。トゥリニセッテ現ボスであるジョットからメッセージを預かっている。拝聴!」
そういうと死ぬ気モードを自分が出せる限界まで引き出し、炎を強く滾らせる。
オレの本気の威圧にだれも動けなくなったところで口を開いた。
「ベールへ。この旅が君にとって大きな転換点になると俺の超直感が告げている。おそらく記憶が戻って家族の下へと帰ったことだろう。そこで辞令を言い渡す!その島をトゥリニセッテの守護下とし、その島を守ることに従事せよ!その際の生活に指示は出さない。好きなように生きなさい。…ただ、困ったことがあってもなくてもいつでもおいで。君はすでに、俺たちのファミリーだ。」
そういうと死ぬ気モードを解いて、ベールさんに手紙を渡す。
それを受け取ったベールさんは、顔をくしゃくしゃにしながら手紙を大事そうに懐にしまった。
「任務、承りました。以降万事お任せください!」
そういうとベールさんは倒れこんだ。
ここに来るまでまともに睡眠をとっていなかったツケが来たらしい。
ナミとノジコの2人が家へと運ぶのを見送ると、おれは宴会場へと足を向けた。
「ルフィ!最初に巡り合ったのはお前だったな。」
そう声をかけると、ルフィは食べる手を止めないままに話し出し

た。
一度落ち着かせて話を聞くと、ルフィは満面の笑みを浮かべながら言った。
「リベルは俺の副船長だからな！」
その言葉に笑みを浮かべたおれは、クルーを紹介してもらうことにした。
鷹の目とやりあった緑髪の剣士…ゾロ。
長鼻の狙撃手…ウソップ。
バラティエの元コック…サンジ。
そして、ここにはいないがナミ。
それに、ゴーイング・メリー号。
我が弟ながらよくもこんなに個性的なメンバーを集めたものだ、と感心するとともにおれが副船長でいいのかとも思った。
それを尋ねると、それぞれ一番の理由は船長命令であるからだということ、次にさっきの辞令を言い渡すときの威圧感が実力者であることの証であると認められ無事に副船長の座に就任した。
そこで、副船長の最初の仕事としてナミが航海についてこれないかもしれないことを話した。
各々当然反応や反発があったが、ベルメールさんという母親が帰ってきたことによる心境の変化があるかもしれないことを説明したうえで、次の出航まで待つという結論に落ち着いた。
そして、一味は出航の時を迎える。

――――東の海《イーストブルー》 コノミ諸島　ココヤシ村海岸
出航の準備は着々と進み、ナミの到着を待つばかりとなった。
船に乗り込んだ一味たちは今か今かとナミの到着を待っていた。
「ルフィ！船を出して！」
ナミが村人の間をすり抜けながら船に向かって一直線に走ってきた。
後ろではノジコとベールさんが呆れたように笑っている。
村人たちがざわつく中、ナミは船へと飛び乗ると村人たちから盗ん

だ財布をこれ見よがしに見せつけながら、いい笑顔でいってきます！と叫んでいた。
村人たちの怒号と歓声を一身に受けて、ゴーイング・メリー号はコノミ諸島を旅立っていった。
「ねぇねぇリベル。あとでベルメールさんの話を聞かせてね。」
「もちろん。おれに会う前のベールさんの話も聞かせてくれよ。」
親睦を深める2人の下へ、サンジが割って入る。
騒がしい雰囲気のまま、船はどんどんと進んでいく。

これから、リベルの冒険が始まる。

さらば、東の海

――東の海《イーストブルー》 海上　リベル視点

波に揺られながら船の上で武器の整備を行う。

セッテ島を出発する前に整備して以降使っていなかったので、武器の整備は簡単に終わった。

刀を腰の右に、二丁の銃を左にしまい大弓を背中に背負う。

トンファーを両袖にしまった後に槍をもって動作の確認を行う。

特に普段は交代で背中に背負うことが多い槍と弓は、念入りに動作を確認していた。

全ての確認を終えたその時、ウソップが話しかけてきた。

「なぁ、リベル！お前それ全部使えるのか？」

「あぁ、もちろん。まだ修行中だけどね。使える手札は多いに越したことがない、ってのがおれの考え方だからさ。」

そういうとウソップは納得したようで、今度パチンコと弓で遠当ての競争をしようと誘ってきた。

それにもちろん、と返していると向こう側に陸地が見えた。

偉大なる航路《グランドライン》に入る前の最後の島、海賊王が生まれそして死んだ街。

始まりの街　ローグタウンに降り立った。

――東の海《イーストブルー》 ローグタウン　リベル視点

「おれはサンジについていくよ。処刑台は見たことがあるから。」

各々がローグタウンでやることを決めている中で、俺はサンジについていくことにした。

船の上での食事や水の確保は、文字通り生命線だからだ。

特に、ルフィはつまみ食いがひどいため、それの予防ができるおれがサンジについていくのは当然の流れだった。

つつがなく買い物を済ませていると、天気が悪くなりだした。

まだ買い物を続けるサンジから荷物を受け取り、いったん船へと戻って荷物を下ろした。

再び市場へと戻ると、そこにサンジの姿はなく処刑台を海賊が占拠

しているという噂が流れていた。
「…ルフィのやつ。何をやってるんだ?」
そう思いながら処刑台広場まで駆けていく。
処刑台広場が見えるところまでついたとき、処刑台に拘束されたルフィが今にも死にそうだった。
とっさも飛び上がり刀を抜くと、そのまま振りぬいた。
「時雨蒼燕流　攻式十ノ型　霧雨」ズバッ
多数の斬撃が空を舞い、処刑台に殺到する。
そして、刃を振りかぶっていたピエロのような男の両腕を切り裂いた。
しかし、両腕から血があふれることはなく、刃は何事も無いように振り下ろされた。
「わりぃ、俺死んだ。」
「「ルフィー!!」」ゴロゴロビシャーン
すると点から一筋の光が降り注ぎ、処刑台を破壊した。
「なはは、やっぱり生きてた。儲け。」
そう言いながらルフィは笑っている。
その様子を見て思わず笑ってしまったが、急いでルフィに声をかける。
「ルフィ、行くぞ!準備ができた。船へ戻れ!」
すると後ろから大量の煙がおれたちを囲った。
「逃がさねぇよ。麦わらのルフィ!死炎のリベル!」
「…へぇ、おれにも懸賞金が付いたのか。ルフィとゾロは知ってたんだがな。」
そう言いながら足を振りぬく。
強烈な突風に煙が流されて道が開けた。
「ルフィ、先に行け!すぐに追いつく。ここを出ればいよいよ偉大なる航路《グランドライン》だ!」
そう言うとルフィは目を輝かせながら船へと戻っていった。
「…やってくれるじゃねぇか。」
そう言いながら煙が人の形をとる。

葉巻を咥えたいかつい海兵に、笑いながら話しかける。
「そうカリカリすんなよ、スモーカー大佐。あいつは海賊王になる男だ。こんなところで立ち止まってる暇はないのさ。」
「ほざけ！ホワイトブロー！」
煙でできた拳がまっすぐおれへと飛んでくる。
それをトンファーで受けると、すぐに煙がおれを囲んだ。
「俺はモクモクの実を食べた煙人間！俺から逃げられると思わねぇことだな。」
おれを拘束しようと煙が狭まってくる。
それを跳躍してかわすと、苦笑いを浮かべた。
「…自然系《ロギア》か。確かに強力な悪魔の実だけどな。対処できないわけじゃない。」
そう言うとトンファーで思いっきり空気を殴りつけた。
「風砕牙」ドウッ
殴りつけた空気の塊が、広い範囲で突風を巻き起こす。
最初の一撃を思い出したのか、全身を人型に戻し風を耐え続ける。
その隙に剃と壁走りを応用して、船へと駆けて行った。

――――東の海《イーストブルー》 ローグタウン 港 リベル視点
「戻ったぞ。」
空から港へふわりと着地する。
周りを見渡すと、ルフィ以外の全員が揃っていた。
「…ルフィは？」
そう尋ねると全員から帰ってきていないと返事があった。
途中で追い抜いたか？…いや、ルフィのことだ、どこかで油を売っているに違いない。
そう思って見聞色の覇気を街に薄く張り巡らせる。
ルフィの気配とスモーカーの気配が同じところにあり、顔が引きつりそうになった。
溜息を吐いてルフィを迎えに行こうとしたが、とてつもなく大きな、そして見知った気配を察知して笑みがこぼれる。

「心配性だな、あの人も。息子を見送りに来たのか。」
そう独り言をつぶやくと、船へと乗り込む。
「ルフィはすぐそこまで来てる。あいつが着き次第すぐに船を出せるようにしておこう。」
そう言うと全員があわただしく出港準備を再開した。
万全の準備が整ったタイミングで、ルフィが戻ってくる。
「ナイスタイミングだ、ルフィ。出航の合図を。」
そう言うとルフィが両腕を掲げて、大声を上げた。
「野郎ども―！出航だー!!」
『おう!!!!』
錨を上げると船が進みだす。
海に出ると嵐はより勢いを増していったが、船は速度を落とさずにまっすぐと進んでいく。
「ウソップ、取舵いっぱい！「よし来た！」サンジ君は砲口を全部閉まって！「任せてナミすぁぁあん！」…あの光が見える？〝導きの灯〟よ。あの光の先に偉大なる航路《グランドライン》の入り口がある！」
「よっしゃ偉大なる海に船を浮かべる、進水式でもやろうか！」
仕事を終えたサンジが樽を持ってきてそういう。
「俺はオールブルーを見つけるために!!」トンッ
「俺は海賊王!!」トンッ
「おれァ大剣豪に。」トンッ
「私は世界地図を描くため!!」トンッ
「お…お…俺は勇敢なる海の戦士になるために!!」トンッ
みんながそういって樽に足を乗せる。
そして最後におれへと視線を向けた。
「…おれは、オレはこの海を誰よりも自由に生き抜くために!!」トンッ
最後に死ぬ気モードになって樽へと足を乗せる。
皆が足を乗せたことを確認すると、全員で足を一気に振り下ろした。

『行くぞ！偉大なる航路《グランドライン》!!』ガコォン

全員で樽を割る。

おれ達の夢のスタートラインが、ようやく見えてくる。

・・・見ていてくれ、サボ!!!

偉大なる航路編
偉大なる入り口

――――東の海《イーストブルー》 リヴァース・マウンテン　リベル視点

「実際に体感してるとはいえ、いまだに信じられないな。船が山を登るなんて。」

感心しながら甲板に立っていると、ナミが大声で指示を出してくる。

「ボーっとしてないで、船が壁にぶつかる！船の操作を手伝って！」

その言葉で我に返り、急いで持ち場につく。

ルフィが体を風船のように膨らませ衝突を回避したり、八面六臂の活躍を見せている。

・・・おれも同じようなことができそうだな。

死ぬ気モードになり、炎をなるべく柔らかくするようにイメージしながら放出していく。

船が傷つかないように集中して炎を放出し続け、ついにリヴァース・マウンテンを通過し、二子岬へとたどり着いた。

「…死ぬかと思った。」

甲板の上で倒れ伏している。

死ぬ気の炎を繊細な使い方をし、なおかつ長時間使用し続けた反動で、体力がほとんどなくなっていた。

ラタがおれをねぎらうようにペロリと顔を舐める。

そんなラタを抱き寄せて、ふらふらと立ち上がり部屋に戻る。

ベッドに倒れ伏すとそのまま意識を失った。

――――偉大なる航路《グランドライン》 二子岬　リベル視点

目が覚めて船室から甲板へと出る。

そこでは仲間たちが、小島でバカンスをしているおじいさんと言い合いをしていた。

・・・あれは！
「クロッカスさん！お久しぶりです!!」
じーちゃんの友人であるクロッカスさんがいた。
そのまましばし談笑を続けていると、ゾロが声をかけてきた。
「おい、リベル。知り合いか？」
「あぁ。彼の名前はクロッカス。優秀な医者でおれのじーちゃんの友人だよ。」
肝心な部分はぼかしながらも、おれはそう答えた。
不自然な海の色、クロッカスさんの存在、そして空、海あらゆる方向から感じる同質の気配…
「ここは何かの動物の中か？」
「ご名答。ここはラブーンの腹の中だ。」
「ラブーン？」
「ここにいるアイランドクジラの名前だ。とある海賊団を待ち続けていてな。」
「そうですか…」
「そんなことより、ここから出られるのか？」
ゾロが声を荒げて言う。
「出口ならあそこだ。」
『なんでクジラの中に出口があるんだよ！』
「クロッカスさん。あの出口開けてもらえますか？あの先におれの弟がいるみたいなんで。」
「いいだろう。」
「ありがとうございます。…うぉ、何の揺れだ？」
「ラブーンがレッドラインに頭を打ち付けているんじゃ。待っていろ、すぐに出口を開ける。」
そう言ってクロッカスさんは出口を開けに行った。
何事も無く出口は開き、そこからルフィと見知らぬ２名が飛び出してくる。
月歩でルフィとほかの２名も回収し、船の上で話を聞くことになった。

「まだいたのかゴロツキめ。私の目が黒いうちは、ラブーンに指一本触れさせんぞ。」
クロッカスさんが言う。
そんなクロッカスさんをよそに、2人はバズーカを取り出し胃を破壊しようとした。
だから、斬った。…バズーカを。
砲口が落ちる。
ギギギと音が聞こえそうな様子でこちらを2人が振り返る。
「あの人とは旧知の仲だ。あの人の守ろうとするやつに手を出すんなら…次にこうなるのはお前たちかもな？」
そう言うと2人は顔を真っ青にして崩れ落ちた。
「悪いな船長。勝手に動いた。」
「いい。俺もなんか嫌だった。」
2人を縛って話を聞くと、どうやらこの2人は近くの島のゴロツキらしく食料目的でラブーンを狙っていたらしい。
そのラブーンも再会を約束した海賊団と会うためにレッドラインに頭を打ち続けているというかわいそうなクジラだった。
縛った2人を気絶させたり縛った縄をほどいたりしているうちに、ルフィが船医としてクロッカスさんを勧誘していた。
案の定クロッカスさんは断ったが、目の付け所が鋭いなと思わず感心してしまう。
出口から外に出ると、意識が戻った2人が逃げたみたいだったが片方が面倒くさい相手だったので見逃しておいた。
ふと嫌な予感がしてルフィを見ると、ルフィがマストを折ろうとしていたのでとりあえず辞めさせて思いっきりラブーンのほうに投げておいた。
そして、ルフィがラブーンを攻撃するのに合わせて獣厳・空砲を打ち込む。
するとラブーンの意識がこちらに向き、ルフィと激しく喧嘩をし始めた。
するとルフィとラブーンは引き分け、再開と喧嘩の続きをすること

を約束し頭にへたくそな絵をかいていた。
・・・結果的にいい感じになったが、ルフィには後で船の大切さをとことん教え込まないといけないかもな。
「キャーーー!」
とナミの甲高い悲鳴が聞こえる。
コンパスが狂ったことに驚いたらしい。
まさか航海士がログポースを知らないとは思わなかったな…これはおれの不手際でもあるか。
内心反省していると、クロッカスさんがおおよその説明をしてくれていた。
どうやらルフィが持っているようだ…あの2人組が持っていたんだろうな。
と思った矢先にルフィとサンジがログポースを壊した。
おれも持っているし気にしなくてもいいんだが…面白そうなので様子を見ることにした。
ナミが絶望を迎えたような顔をしてるし、ルフィは吹き飛ばされるしカオスだな。
横でケラケラ笑っていると、ナミに頭をはたかれた。
「どうしたんだ?」
「どうしたって…見てよこれ!」
と割れたログポースを俺に見せてくる。
「それなら私のをやろう。もう使うことはない。」
「すみません、クロッカスさん。あ、これ家族からです。いつでも遊びに来いと祖父から伝言を預かっています。」
そういって数枚のチケットと航路を渡す。
クロッカスさんは嬉しそうにそれを懐にしまって、思い出話をしてくれた。
クロッカスさんとの思い出話に花を咲かせていると、2人組を乗せて送ることに決まったらしい。
「それで?ここからどの航路で向かうんだ?送るってことは決まってるんだろ?」

「ええ、次の目的地はウィスキーピークよ。」
「知らない街だな…いいのか、ルフィ？航路を選べるのはここくらいだぞ。」
「あぁ！気に入らなかったらもう一周すればいいだろ？」
「もう一周？あなたいったい何者なの？」
２人組の片割れ、厄介な方の女がルフィに尋ねる。
「俺は海賊王になる男だ。」
自信満々にルフィがそういう。
・・・相変わらず面白い弟だ、ルフィは。
そう心でつぶやき船に乗り込む。
「じゃあな、行ってくるぞクジラ！」
そう言ってルフィが最後に船に乗り込む。
そうして一味は、ウィスキーピークに向けて旅立っていった。

王家の依頼

――――偉大なる航路《グランドライン》　海上　リベル視点

「さっむーーい!!何なのこの海は!?」

ナミが船室から叫んでいるのが聞こえる。

偉大なる航路《グランドライン》初心者にありがちな混乱の仕方だ。

さっきナミに偉大なる航路《グランドライン》の常識を教えなかった不手際があるから、一応アドバイスをしておくか。

「ナミ!ログポースを見ろ!この海で変わらないのはログポースの指す針だけだ!」

「さっき見たわよ…って何これ!ウソップ!１８０。旋回!行先が変わってるわ。…ほら、あんたたちも動いた!客じゃないんだから働け!」

船内がせわしなくなっていく。

偉大なる航路《グランドライン》初心者にありがちな光景に苦笑いしながら、おれも持ち場について船を操作していく。

皆がドタバタしている中、ゾロだけは熟睡していたがナミが起こしに行っていたので放置しておいた。

「前方に氷山!船の進路を変えて!ぶつかっちゃう!」

「あー多分間に合わないぞナミ。ちょっと下がってな。」

そう言って先端が丸くなっている矢のついた弓を思いっきり引く。

死ぬ気モードにならなければ引けないくらいの大弓を、ギリギリッという音が聞こえるくらいに弓を引き絞りじーちゃんから受け継いだ技を解き放った。

「剛弓〝轟〟!!」ズドンッ

大きな唸りとともに弓が解き放たれ真っすぐ氷山へと進んでいき、そのまま氷山を大きくえぐり、粉砕しながら彼方へと飛んでいく。

その反動で船は大きく揺れるが、氷山の脅威がなくなったおかげで船は無事に進んでいく。

「「それでは私たちはここで失礼。送ってくれてありがとう。」」

そう言いながら船を飛び出し、２人組は泳いでウィスキーピークへ

と向かっていく。
それを呆れたように見送り、一味はウィスキーピークへと到着した。

――――偉大なる航路《グランドライン》 ウィスキーピーク リベル視点
「ようこそ、酒と音楽の街 ウィスキーピークへ！ここではもてなしこそが我らの誇り。皆様の冒険の話を肴に酒をふるまう宴を準備させてください。」
ウィスキーピークに到着したおれたちを待ち構えていたのは、街を挙げての大歓迎だった。
どう見ても怪しいし警戒するべきなんだが、ルフィとウソップ、サンジは当然のように受け入れてテンションが上がりきっている。
ゾロとナミは気づいていそうだし、２人に任せておれは船でも見張っておこう。
これくらいの力量しかいない街だし、ルフィたちにはいい勉強になるだろう。
そう考えて俺は船に残ることをルフィたちに伝える。
そうして俺にも大量の酒や料理が運ばれてきて、船の前で簡単な宴会が開かれていた。
酒に酔ったふりをして船に戻り、そして夜が更けていった。
「この船からありったけの武器と食料、宝をいただくぞ！中にいる海賊は殺しちまえ！」
そんな声が船外から聞こえてくる。
不躾にも船にずかずかと上がってこようとする何人かを船上から打ち抜くと、集団の前に飛び出て問いかける。
「船にいる海賊は殺しちまえ？それはおれのことかな？」
そう言うと一斉に銃口がおれに向けられる。
銃が放たれる前に集団に突っ込むと、発砲して相手の手にある銃を弾き飛ばしそれを奪う。
そのままグリップの底部で相手を２人同時に吹き飛ばすと、弾き飛

ばした銃で発砲し相手を荒らしていく。
そのまま船の前にいた全員を無傷で片づけると、遠くから狙撃される。
飛んできた銃弾を自分で撃った銃弾で弾き、見聞色の覇気で相手の位置を正確につかんで狙撃し返す。
すべての敵を倒し終えたところで、大立ち回りしていたゾロの方もどうやらひと段落ついたようだ。
ゾロが斬ろうとしたら一応止めに入ろうかな？って考えてたけど、何やら揉めだしたので必要なさそうだ…ん？
ちょっと止めに入るか…

――――偉大なる航路《グランドライン》 ウィスキーピーク
「うおおお!!」ガキンッ
「…いつまでやってんだ。手合わせをするにしてもほどほどに、だ。」
ルフィの拳とゾロの刀をそれぞれリベルがトンファーで受け止める。
急に止められた2人の矛先がリベルに向けられるが、リベルがトンファーを各々の腹部に振るったことで勝負はひとまずの決着を迎えた。
「…で、だ。船にいるときはあえて放置してたけど君ネフェルタリ・ビビだろ？アラバスタの王女がこんなところで何してる？」
そこにナミが遅れて到着し、リベルに声をかける。
「よくやったわリベル。これで10億ベリーゲットよ！」
「何の話だ？」
そこでナミからアラバスタまで護衛する代わりに報酬として10億ベリーをもらおうとしていることの説明がなされた。
「…話は分かった。ナミ、踏ん張れよ。」
そういってリベルがナミにデコピンをくらわせる。
よろめいて涙目になったナミはリベルに詰め寄った。
「なにすんのよ！乙女を傷つけて！これは安くないわよ！」

「なぁ、ナミ。おれはその話は初耳だし、寝てたであろうルフィにも話は通していないな？一味の今後の航路にかかわる問題を、船長や副船長に相談もなく決定し利益を懐に入れようとするのが航海士の役目か？欲を出すなとも言わない、金儲けの話を勝手にするのも構わない。ただ、それは個人の話であって一味を巻き込むのは筋が通ってない。そう思わないか？」

そう諭すリベルにナミは少し反省したような顔をする。

「この海は常識が通じないんだよ。いい意味でも悪い意味でもな。冒険するにしても危険に突っ込んでいくにしてもこの一味の船長はルフィだ。一味全体で請け負うんならルフィに話はしておこうな。…で船長、どうする？」

その言葉に、ゾロとの間の誤解を解いて談笑していたルフィがリベルのほうを向く。

「そもそも１０億ベリーなんて払えないわよ。」

口を開きかけていたルフィより先に、ビビが話し出す。

「どうゆうこと？アラバスタって大国なんでしょ？」

ビビの言葉に反応したナミがそう尋ねる？

するとビビは、アラバスタが大国として栄えていたのは過去のことで、現在は内乱が起こっていること、原因を探るうちに耳にしたバロックワークスという組織に潜入し情報を収集していたこと、バロックワークスがアラバスタを乗っ取ろうとしていることを話した。

「それで、ボスって誰なんだ？」

ルフィがビビに聞く。

ビビは言うまいとしていたが、王下七武海の一角であるサー・クロコダイルであることを話してしまう。

それを聞いたナミが絶望したり、逃げようとしたり、逃げ場がなくなって絶望したりしていると奇抜な格好をしたイガラムビビの護衛としてバロックワークスに共に潜入していたアラバスタ王国の護衛隊長。ウィスキーピークの長もしていた。が現れた。

イガラムの奇抜な格好はビビの変装で、自分がおとりになるからビビを国まで連れて行ってほしいとルフィに告げる。

「何のことだ?」
ルフィがそうつぶやく。
その言葉を聞いたリベルがナミにジト目を向けている間に、ゾロがあらましを説明していた。
報酬の交渉をしようとするナミを遮って、ルフィはその約束を快諾する。
そんなルフィにリベルがデコピンをかまし、様々な条件を設定して契約を結んだ。
「1．ログのたまり方次第で変動するため届けられる時期がいつかは分からないが、なるべく早く送り届けること。
2．自分たちにとって優先すべきことが起きた場合、そちらを優先すること。
3．しっかりと送り届けた際に、ビビを送り届けたにふさわしい報酬を王家が用意すること。」
この条件にビビとイガラムは納得したため、ルフィに確認をとったリベルは麦わらの一味として正式に契約を交わした。
報酬に思いを寄せるナミにリベルが苦笑いをしていると、出航の準備を終えたイガラムが最後に一味やビビと挨拶を交わす。
そしてイガラムを乗せた船は、ウィスキーピークを発ちアラバスタへと向かった。

――――偉大なる航路《グランドライン》　ウィスキーピーク　リベル視点
船が出航し沖に出たぐらいでおもむろに大弓を取り出し、誰にもばれぬように弓を放った。
「忍矢〝影〟」
真っ黒に塗られ視認しづらい矢が空を割いて船へと向かっていく。
船に到達する手前で何かにぶつかった矢は大爆発した。
「これくらいはサービスしておいてやろう。」
まるで船が爆破されたように見える光景にビビがショックを受けている中そう呟き、ルフィたち一味に指示して出航の準備を進める。

サンジやウソップを回収し、一味の船は速やかにウィスキーピークを離れログポースが示す先へと進んでいく。
途中で船に何者かが乗り込んできたが、敵意がなかったので無視をしていると会話に交じってきた。
剛毅な女性だと思いつつ目を向けると目を見開いた。
「悪魔の子　ニコ・ロビンが何の用だ。」
そう口の動きで伝えるとロビンは驚いたような目をこちらに向け、秘密にしておくようにジェスチャーをする。
そのほうがおもしろそうだと思ったので黙っていると、会話の不自然さに気づいた一味たちがロビンに武器を向けた。
すると船の隣に着けていた大亀から、一人の男が敵意を発しながら乗り込んできて発砲しようとしたのでそれを蹴り飛ばして抑える。
そのまま男を抑え続けていると用事を済ましたロビンが男に声をかける。
「もう十分よＭｒ．Ｅｘｔｒａ。帰りましょ。」
「ここで仕留めておかないのか？」
そう尋ねるＭｒ．Ｅｘｔｒａに必要ないと告げてから、ロビンは大亀に乗り込んでいった。
するとＭｒ．Ｅｘｔｒａはおれに「次は仕留める。」と言い残すと大亀に乗り込み船を去っていった。
ある程度離れたところで置き土産のように放たれた砲弾を斬り飛ばすと、船の中へと戻っていく。
船ではビビが頭を悩ませ、サンジやウソップは説明を求めルフィに詰め寄っていた。
このようにビビを乗せた麦わらの一味は、次の島〝リトルガーデン〟を目指して進んでいくのであった。